

西川滿編
東亞旅行社
刊

版 畫

臺灣繪本

西川 滿編



東亞旅行社

刊

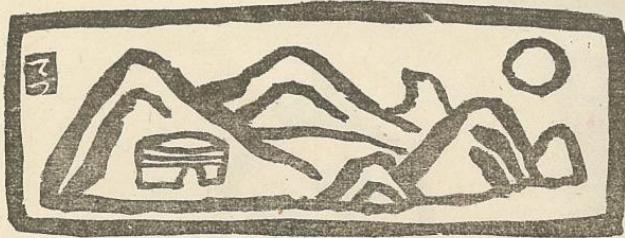


版　　畫

立　石　鐵　臣
宮　田　彌　太　朗

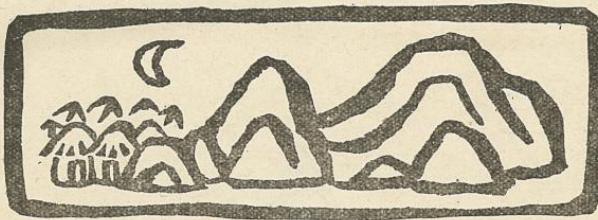
裝　　畫

立　石　鐵　臣



華麗島頌歌	二
博物館	六
新公園	九
機關車	一
ホテルと睡蓮	三
臺灣の蝶	五
大天后宮の歌	六
臺北大正町	一〇
竹の笠	一〇
各人各説	六
竹の花	三
竹椅子	三
夏の庭	三
南の女	毛
七娘婿と海老の皮	七
童話	三
牡丹と雲	三
花燭	三
天公爐	三
阿里山	三
料理の聚落	三
高砂族の民藝	三
臺北菜町の雨	三
牡丹と白鶯と鳥	三
赤タバコ	三
仔供	三
野歌	三
長衫	三

洗濯	六
館街	六
蛇	六
童話	六
牡丹と雲	六
花燭	六
天公爐	六
阿里山	六
料理の聚落	六
高砂族の民藝	六
臺北菜町の雨	六
牡丹と白鶯と鳥	六
赤タバコ	六
仔供	六
野歌	六
長衫	六



甘 薫 果物の歌
相思樹
大屯火山羣
灣生の娘
東部断章
水牛
鹿廟
鳳凰
水牛
移民
山村
車
竹と民家
白手長猿と猩々
斗六旅情
泥棒の話
木瓜と榕樹
墳墓と迷信
盛り場
城門
連続
福龍
船骨
車虎
杯
あやつり人形

執筆者

宮 龍 池 川 新 立 濱 西
田 田 合 垣 石 田 川
彌 瑛 敏 三 宏 鐵 集
太 朗 宗 雄 良 一 臣 雄 滿

九
八
七
六
五
四
三
二
一
〇

六
五
四
三
二
一
〇
九
八
七
六
五
四
三
二
一
〇

臺
灣
繪
本



本書所載の版畫と文は一
切複製並に轉載を禁ず

華麗島頌歌

雲はまだ去らない。日は斜め。背の高い白牛を追つて。
珊瑚の少女は。龍角を吹く。みどり花咲く。沖に幾匹も。泳いでるるのは。あれは鯨だ。



—(2)—

*
潮の湧く安平。砲壘の上に腹ばつて。私は赤坂城の悲哀を
思ふ。今は遠いかのひとよ。廢墟の草はゆれて。私のこころ
も砂のやうに重い。

—(3)—

貝多羅花咲く法華樓で。尼僧は紗心を切つてゐる。玩月臺
に棄てられた。關刀燈の傍には。蟲干しの大藏經。蝶を追つて。童子は歸らうともしない。



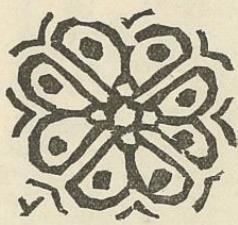
車はゆく。櫻轆として。陽もささぬ鹿港の裏街。うらぶれて。そこかしら簾に寝ね。もの乞ひて。砂丘に立てば。海鳴りばかり。十六夜の月もまだ出ぬ。

*
たそがれて。鳩が啼くとき。「聖歌」を手にした鳥牛欄の蕃女たち。悲母瑪利亞は教會の屋根に降りてくる。新婦のやうに。ああ。天にかがやきそめた翌火蛇。

面影は瞼にぬれて。はろかなひとよ。龍舌蘭のとげはいたい。傷ついた指をなめ。私はむなしく去る。あかつき。葬列のすぎる。古い西班牙の紅毛砲。

*
暖々はけふも雨。小舎では月桃を探り入れる。けむる噶瑪蘭三十六社。栗をつく杵歌も聞こえない。竹籠背負つた監、勇が。七曲りの坂で待つてゐる。老いた母を。

私はかの日のかひやぐら。ゆきどころもなく流れては。七つの峰をかけめぐる。あはれ。夜霧の海上に。はかなく消えてまたともる。彭佳嶼の燈臺よ。



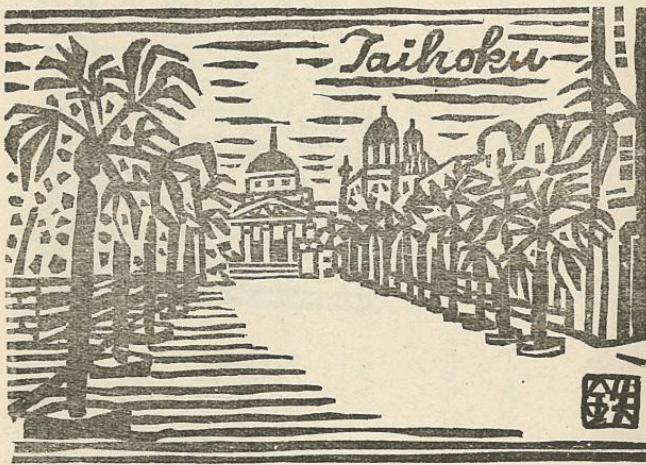
博物館

臺北驛に降りた人は、驛前の美しいびらうの並木通りの正面に、壯麗な希臘ドーリック式の白堊の殿堂が聳えてゐるのを見るであらう。この建築様式獨得の、中央にある六本の太い圓柱と、青い圓屋根との全體の感じから、はじめての人は、いかめしい政廳とも思ふかもしれない。が、これこそ兒玉源太郎と後藤新平とを記念する博物館なのである。この記念博物館は明治三十九年十二月、當時の民政長官であつた祝辰巳の發議によつて、さきの兒玉總督、後藤長官の一人を記念するため、臺灣全島官民の醵金を求めて着手されたもので、工事は大正二年四月一日にはじまり、完成したのは同四年三月二十五日である。陳列品は必ずしも豊富ではないが、臺灣を訪れる人は、先づ半日をここで費してから視察に入るべきであらう。その程度の資料を、この美しい博物館は有つてゐる。

西川満

—(6)—

—(7)—



新公園

昭和十年、領臺四十週年を祝ふ博覽會の時、この銅像は、すぐ横に建つた演藝館の蓬萊踊りの唄、囃子、とんとんと踏みならず踊り子の足音に若がへつてゐた。

今は、うしろの近代的ステークを持つ音樂堂が奏でる、大東亞の行進曲に時を得顔だが、時々眼の前の芝生の廣場に、英靈を弔ふ市葬がとり行はれると、彼は默然と頭を垂れる。

でも夏の朝、そこに集る町の人々のラヂオ體操は愉しく、夜毎々、すぐ近くの放送局から、都子やゆうかりやゴムの梢をゆすつて流れてくる音波も、耳に快い。

南方圏の建設が國家の課題である今、彼後藤新平の大風呂敷は、はつきり思ひ出されてよい。

臺灣に於ける彼の政策、それは新らしい南方建設に、いかに多くの示唆を與へるものか。

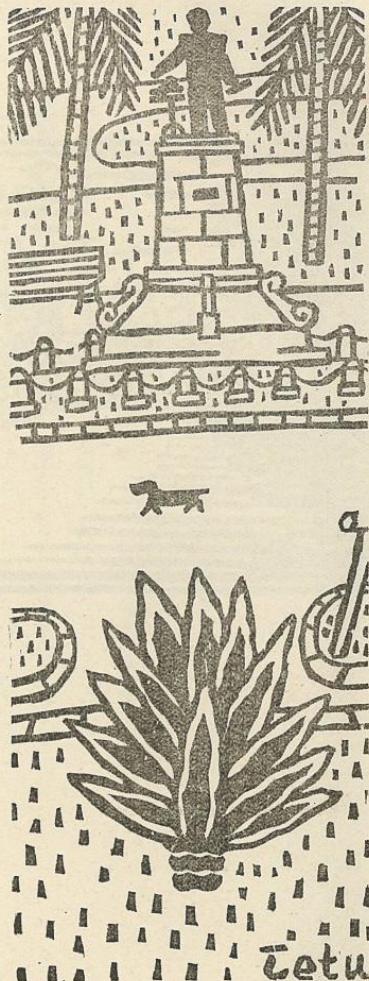
臺灣にはもつたないと云はれた、眼前にそそり立つ白亜の巨大な博物館をみよ。

今はすでにそれも小さい。

新公園。

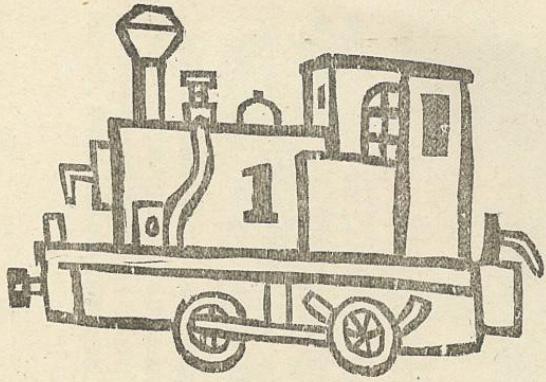
それはただ縁美しい憩ひの園のみではない。

青く高い空に、ゆうかりの梢に、博物館のドームに、南方への雄大な意志を燃やすところでなければならぬ。



—(8)—

機關車



博物館の前庭、つまり新公園の西北の出口に近く、二輢の機関車が置かれ
てある。

向かつて右にあるのが第9號機関車で、英國アボンサイド・エンジン會社
製の日本最初の機関車である。つまり明治五年、新橋横濱間の鐵道に使用さ
れたものの一つである。

向かつて左にあるのは、ここに版画を入れた第1號機関車「騰雲」である。

これは臺灣最初の機関車で、清朝時代、時の臺灣巡撫劉銘傳が、光緒十三
年、獨逸のホーリンフォード會社に命じてつくらせたものである。

これは本來、博物館の中に陳列るべきものであるが、場所がないので、
便宜上かうした芝生の一隅に置かれてあるのだ。博物館の階上の歴史室に、
この機関車の寫真があるが、それに満足することなく、必ずこの機関車のと
ころまで足を運んで欲しい。

ホ テル と 睡 蓮

臺北驛を降りると、廣場越しに赤煉瓦の建物が見える。鐵道ホテルである。臺灣でよく見る型の私の好きな建物である。驛も前は同じやうな赤煉瓦のものだつたが、今は新しい簡単なものに變つた。昔の建物は不便なところが多からうが、見た眼にはどれもい。落ちついてしつかりした感じである。

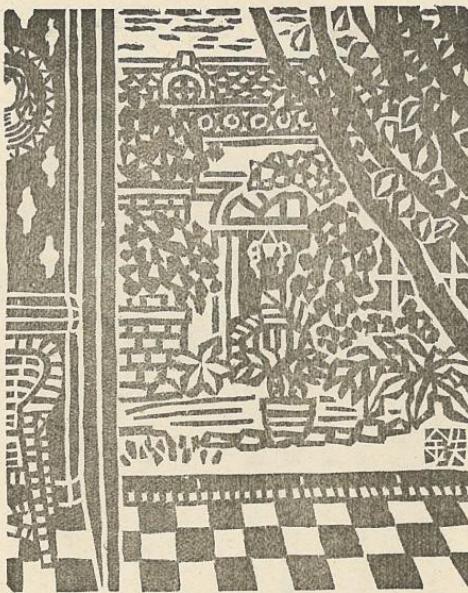
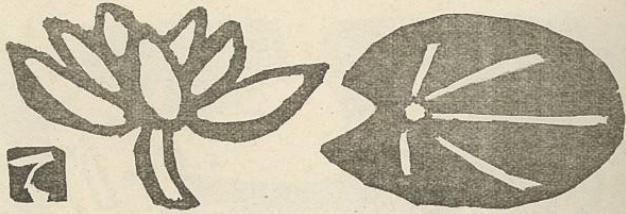
插繪はホテルの玄關を入つたところのホールから見た中庭である。少し繪に嘘がある。床は圓のやうな市松模様ではないし、壁に美人の額は掛かつてゐない。

ホテルの前の檳榔の並木を通り、樹々の青緑がいつも美しい新公園に行かう。

この公園には池^ハいくつもある。圓形、方形、自由形とさまざまの形である。どれにも睡蓮^ハある。睡蓮は内地でよく見てゐたのは遠つて、花の位置が水面よりも高い。水面に浮んでゐる感じでなく、水面から上へ出た莖の上にしつかりついてゐる。何となくたくましい。野生的である。

花期はいつと云つたらいいのか、咲く頃と思ふ時にかけをひそめてゐるやうだし、冬の十二月に咲きほこつてゐるやうである。夏の過ぎる頃から冬へかけてのながい花期を持つもののやうな氣もある。

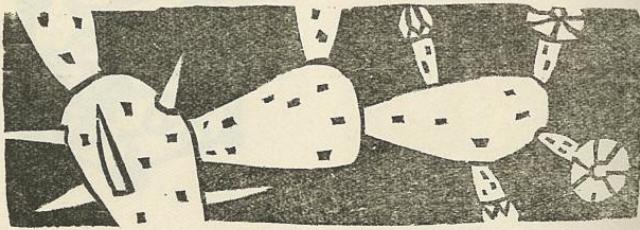
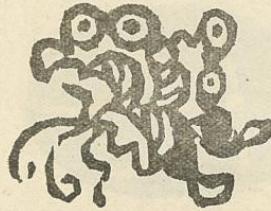
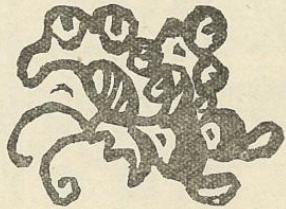
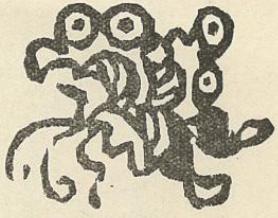
白い色と赤い色の花で、赤い色にはものものしいほどのもある。葉をギシギシ寄せ合つて、花もなかなか元氣がいい。夢見るやうではなく、競つて演説してゐるやうである。



臺灣の蝶

蝶、蝶、蝶。美しい島に目もまばゆき花は咲き、その花がけをゆつくりと飛び交す蝶の美しさは、我らを驚かせる。赤き佛桑華の花の上を、はたりはたりと豪華な羽根を打ち振りながら飛行する「きしたあげは」に、「るりもんあげは」。茉莉の白い花の上を、綠こきサボテンのほとりを、ひらひらと舞ひつつ廻る白き蝴蝶は「たいわんもんじろてふ」。あい誰か莊周ならずとも、蝶と化して華麗の夢を見むと思はざる。臺灣にありとある蝶の數々、その種類幾百なるか數ふるに耐へざるも、臺中州埔里社はもつとも美名なる產地なり。臺灣にゆかりある名を得し蝶の一部を左にあげん。

○たいわんもんきあげは ○たいわんひめしろてふ ○たいわんもんじろてふ
 ○たいわんすぢくろてふ ○たいわんしろてふ ○たいわんやまきてふ
 ○たいわんすぢてふ ○ほりしやるりまだら ○たいわんあさぎまだら
 ○たいわんうらなみじやのめ ○たいわんきまだら ○たかさごいちもんぢ
 ○ほりしやいちもんぢ ○たいわんふたをつばめ ○たいわんくろつばめ
 ○たいわんくろしじみ ○たいわんじじみ ○たいわんはなせせり
 ○たいわんあをはせせり



—(15)—



大天后宮の歌

大白牛車に鈴かけて。鳳凰木花咲く路を。行くは童か。朝
あけを。ひとり遠く旅に来て。御母よ。ほのほのと。

昨日別れた花娘の。漂ふは髪の匂ひか。香烟か。胸せまり。
ぬかづいて。祭壇の筈。手にとれば。

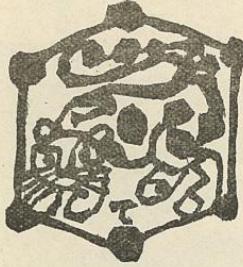
襦子のマントの朱のいろに。あはれ。肌なまめいて見えた
まふ。烏面の姫祖の微笑よ。かほそい指よ。もの云はぬ。

一匹の虎の切なさか。眞晝。赤い紙籠かちらばつて。地獄
の責苦負うてゆく。兒等に代つて病める身は。ああ。むなし
く吠えて。

暗い梁に。自ら綱かけた轡王。浮彫の飛龍だけが知つて
ゐる。紫陽花いろの悲しみを。五妃の乳房のつめたさを。

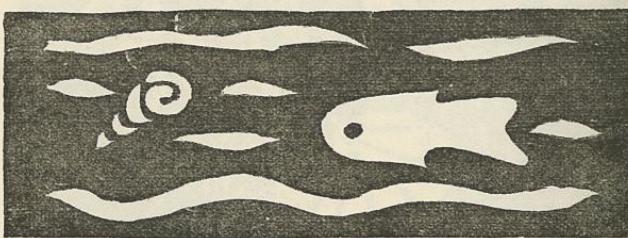
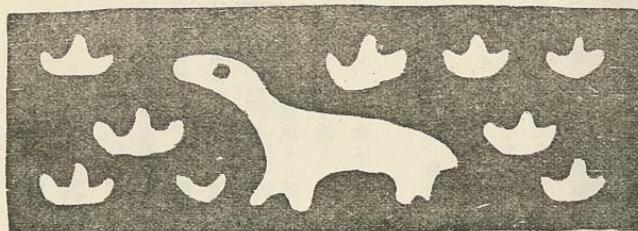
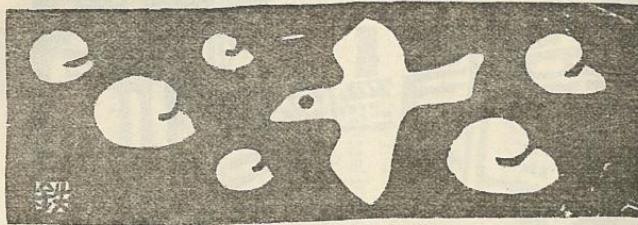
暮れゆく。古都の米街に。黃燈ともす。長衫の女よ。金紙
よ。騎馬將軍の廻廊に佇みてあれば。汐もとどろ。

鹿耳門の海鳴りに。波は天に連つて。夕陽にうねる七艤身。
わが心のそれか。鄭氏の羈業か。ものうく消えて。



各人各說

鳥



水牛——我輩はあまり有名すぎる。

豚——私も。

穿山甲——僕の仲間は世界中からだんだん姿を消して行くさ

うである。寂しい限りである。僕は蟻が何より好物だ。この頃

は僕達の草が大分高値を呼んで貴重品扱ひをされてゐるさう

だ。あまりお喋りをしてつかまらないうちに逃げ出さう。

獣——私は鹿の仲間ですが、鹿よりも小さくスマートです。

まあ、このすんなりした肢體と洗練された走り振りを見て下さい。誰でも惚々するでせう。

魚介

臺灣家鴨——僕の祖先は南米ださうである。十七世紀頃南米から歐洲へ渡り、アメリカ、支那を経て臺灣にやつて來た。僕達の見かけはあまりきれいでないが、卵も産むし、肉もうまい

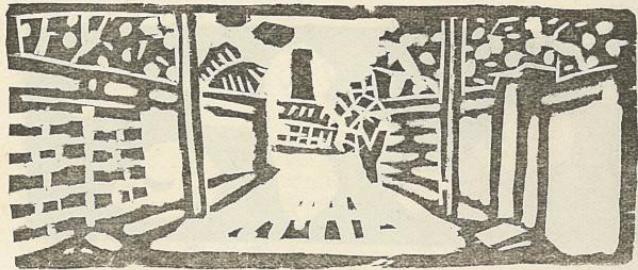
鯨——私は何と言つても「からすみ」の親ですからね。我が子をほめるのも嫌ですが、あいつは私よりずつと珍重されます。

鱈魚、鮭魚、虱目魚——僕達は浮世の荒浪を知らない魚塩(養魚池)育ちです。塩魚と呼ばれます。

蛤——婚禮の夜、私を食べるとその家が富貴になるといふ迷信があります。

川合三夏

臺北大正町



基隆から南下した列車が、正に臺北驛に入らうとする直前、通過する踏切がある。この踏切から東北一帯の星敷町が大正町である。

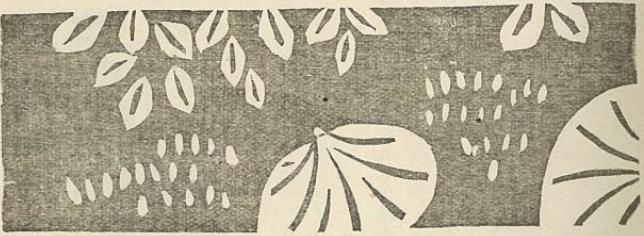
大正町は、はじめイ通り、口通り、ハ通りと呼ばれていたが、どんどん家が建つに従つて、やがてへ通りが出現するに及び、改めて一條通り、二條通りと呼ばれるやうになつた。

その名の示す通り、大正年間に發達した町で、現在一條から九條まであり、その先は古名三板橋——改めて三橋町——の墓地になつてゐる。

大正町のよさは、整然たる住宅の並列と、家々の樹々の美しさとにある。

城内と大稻埕と萬華だけを案内すると、大抵の旅人が、一體内地人はどこに住んでるのかと首をかしける。旅人を安心させるためにも、先づ大正町は御覽に入れる必要があらう。

西川満



—(21)—

—(20)—

竹の笠

問 竹の笠の長所並にその效用を述べよ。

答 竹の笠は廉い。

竹の笠は軽い。

竹の笠は涼しい。

竹の笠は風情がある。

竹の笠を愛用すれば神經衰弱にならぬ。

竹の笠は時に生命を保證す。

なぜなら、樹の上からぶらさがつてゐる青竹絲(毒蛇)が、飛びついて來ても、竹の笠をかぶつて居ればスルリとすべつて地面に落ちるから。

もし竹の笠をかぶつてゐなかつたら……?
この假定に脊すちの寒くなる人は、山へゆくとき竹の笠をかぶるに限る。
竹の笠は内地土産になる。以上。

西川満

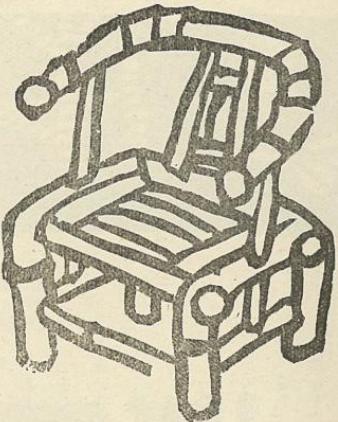
竹の花

竹に花を生ずる例は、臺灣では決して珍らしいことではないが、昔から竹に花の開くことを甚だ忌みきらふ風がある。竹の花が開くと擾亂あるひは饅籠があると云ふのである。舊記に、道光四年五月に竹花を生じ讃言を生じたと記してあるが、林爽文の亂に際してもこの兆があり、果してその年の十月には所謂許楊の亂が鳳山縣に起つたと云ふ。日露戰争の際もこの竹花を利用して盛んに流言を傳播したと云ふ記録が残つてゐる。又明治四十年の鹽水港の土匪事件は二股の竹が生じたために、これに乗じて起つたのであつた。

池田敏雄



竹椅子子



生後滿四箇月と云へば漸くお坐りが出来る様になるが、この日の祝に、子供を椅子の中に入れて坐らせる行事がある。それは俗に「腰掛け早くお父さんにおなり」とその成長を祝福されるのである。

足が立つ様になると、竹でこしらへた四方椅の中に入れられる。四方椅は二尺四方あまりの底のある竹の柵で、子供は縁につかまつて立つのである。

誕生日も過ぎて、やがて三つ四ついたづら盛りになると、どの子も自分からすんで擣椅に坐る様になる。これは肘掛けついてをり、殊に男の子がこれに坐つて後によりかかりながら腰揚にかまへてゐる有様は、如何にも小大人らしい風情である。

—(23)—

—(22)—

竹空園
元宵ノトシ
眞

池田敏雄

夏の庭

籐椅子に花影が落ちてゐる。

扶桑花の朱い風鈴咲、大輪咲、紅、櫻、黃、淡紅の八重咲、艷麗な夾竹桃、愛らしい美人蕉、白い秀英花。

かなたに檳榔、蕃石榴、楊梅、朱藥、龍眼、棗果、蓮霧。

そして茉莉は、はげしく白く匂ふ。この小さい花のために孫元衡といふ詩人は、うたつてゐる。

佳人小立畫廊西。

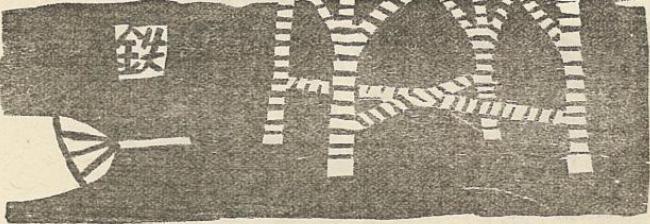
紈扇迎風手自携。

雪瓣恐教蟬翼重。

漫華應遣鳳頭低。

さるにしても、紈扇（あふぎ）を忘れた佳人は、どこへいったのだらう。

龍 瑛 宗



南の女

扇子は、夏の女にとつて、かくことのできない裝飾のひとつである。

蝶々のやうに、ひらひらすると、ふしきに、女はいきいきとみえる。

南方の逞しい男性的な夏を、女は色とりどりな、うつくしい情熱をもつて點描する。

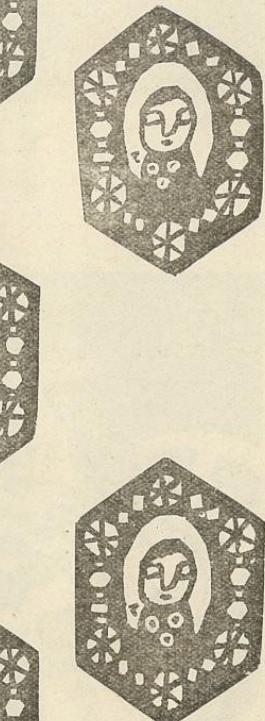
南方の豊麗な自然は、彼女たちを彩色し、彼女たちの清艶は、南方の自然を彩色する。

光、光、光、碧は空、椰子、椰子、粧へる夏の女は、椅子に凭りて、しばしの憩ひ。

ああ。
たをやかな南の女に、幸あれ。

龍 瑛 宗





七娘媽と海老の皮

その男は貧しかつたので、七娘媽のお祭が來ても、お供物を買ふことが出來なかつた。そこで男は朝早くから畠に出て野菜を探り、今日はお祭だから、きっとよく賣れるに違ひない。もしもうけがあつたら、お供物を買つて歸らう、と思ひながら町へ賣りに出かけた。町では、やはりすぐに賣り切れてしまつた。けれども釣銭をまちがへたり、ましてやつたりしたので、一文ももうからなかつた。力を落して、とぼとぼと足を引きづりながら、ある料亭の前に来かかると、ちやうど料理人が海老の皮をむいてゐた。男は、それを賣つて下さい、と頼んだ。すると料理人は、欲しいならいくらでも持つて行くがよい、と快よく許してくれた。男は、とても喜んで、厚く禮を述べ、他人に見られぬやう、海老の皮を紙に包んで籠に入れ、擔いで歸つた。が、運悪く途中で近所の人々に出会い、お供へに何を買つて來たのかね、と尋ねられた。男がかくさうとするのを、人々は無理にあけさせて、なんだ、海老の皮ぢやないか、そんなものを供へたつて、神さまはお喜びにならないよ、とあざ笑つた。男は今までのあかるかつた心も急に暗くなり、世の中が無性につまらなくなつて、家に歸ると、そのまま寝床へ入つてしまつた。間もなく黄昏れて、星々が輝きそめ、近所の家々では、楽しい七娘媽のお祭を始めた。人々は、かほるがはる神前に筈を擲げて、今年の運勢を占つた。けれども幾度擲げても、怒筈いろあわが現はれるばかりであつた。一人の老人が、ふと晝間のことを思ひ出し、試みに、それでは海老の皮をお供へすればよろしいのでせうか、と尋ねて筈を擲げると、はじめて好筈よしわが出た。人々はわがちに男の家の顎を突きつけ、海老の皮を賣つて下さい、と頼んだ。おかげで男はたくさんのお金を手にし、御馳走をこしらへて、やさしい七娘媽にささげまゐらせることが出来た。

* 七娘媽たなばたさま、七月七日を七娘媽生と云ひ、お祭する。尚、臺灣では七娘夫人とも稱して、天に織女が七名ゐ

* 答 竹根で造つた外凸内平の、三日月形一對のト具。

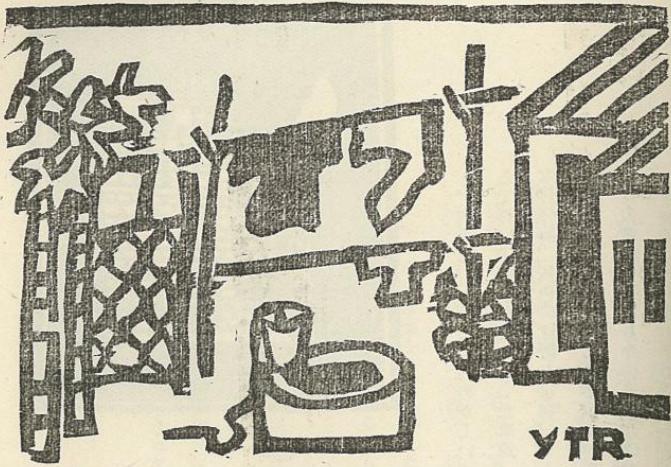
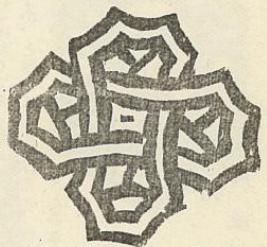
洗灌

本島の婦人は洗濯が好きである。朝早く、暗い内から小川の岸邊に立んでせつせと洗ひものいそしんでゐる。まるで洗濯を楽しんでゐる

かのやうな、これらの姿は田舎に限らず都會の
陋巷の井戸端や、共同水道の傍にも見られる。

裏街に、所狹きまでに展けられた干物の壯觀は、あの旺盛な洗濯勞作の結果と思ふと、上のものも下のものも大びらに擴げた放膽さをも合せて、壓倒されるであらう。

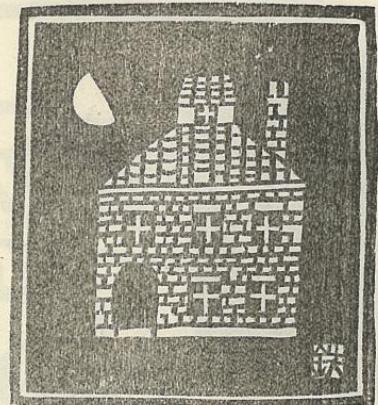
新垣宏一



—(29)—

—(28)—

六館街



臺北で最も異色のある街は？と聞かれたら、私は即座に六館街を挙げる。もつとも六館街と云つても、

今の人にはわからぬかもしれぬ。

伊太利亞領事館前のクリークを渡

つて、淡水河の第八號水門にむかふと、右手に、いかにも古めかしいエキゾチックな街並みが見える。低い、まるで谷底のやうな細々とした車道、その兩側につらなる高低をもつた不規則な停仔脚、灰色の沈鬱な建物、そしてコバルトいろに塗られた窓枠、——それは廢墟に近い、まるで忘れられたやうな街だ。それが往時、最も繁榮を誇つた六館街、つまり今の港町なのである。

淡水河の土砂の堆積は、一府(臺南)、一鹿(鹿港)、三艋舺(萬華)と呼ばれ

るくらゐ商業の中心地であつた古い艋舺の殷賑を大稻埕に奪ふことになつたが、六館街こそは、正にその當時大稻埕の花形であつた。最初洋風の、大きな茶館(製茶工場)が六つ出来たので、人呼んで六館街と云つたのだが、今でもこの街を通れば、衰へたりとは云へ、甘い茶の薰りを停仔脚のあたりまで漂はせてゐる幾つかの茶商の家を見かけるであらう。

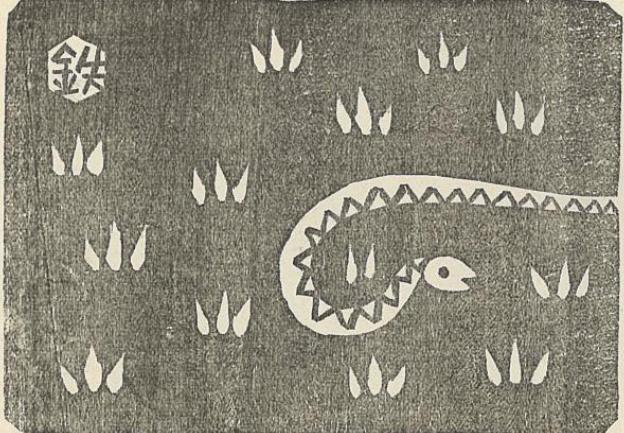
時にはまたそれらの茶商の、停仔脚に、匂ひのよい白い花を髪に挿した若い女や、眞赤な簪を白髪に挿した老婆などが、しゃがんだまま、黙々と茶のよりわけをしてゐるのを見るかもしれない。

それにしても六館街のよさは、けむるやうな雨の日の午後と、月に暈のかかつた朧けな夜にある。もし、はじめて六館街を訪ねようとする人は、そのいづれかを選ぶがよい。

この古い街を通り、裏側のクリークづたひに歩き、おほろ月にかすむ淡水河の河岸を歩めば、旅愁しきりなるものを覺ゆるであらう。

蛇

ツオ族にこんな傳説がある。



昔ある男が山に行くと、どこからともなく子供の啼聲が聞える。不思議に思つて近寄ると、一匹の大蛇が子供をとぐろの中にかばつて、舌で大事さうに嘗めてゐた。彼は蛇を追ひはらひ、子供を家につれて歸つて、自分の子供として育てた。やがて、彼は立派な若者となり、鹿狩にも首狩にも度々手柄を立てた。彼は自分を育てくれた男に實の親として仕へ、他の子供達とも本當の兄弟の様にして楽しい月日を送つてゐた。或日、一家打揃つて園樂してゐると、どこからともなく呼び聲がする。それを聞くと若者は「母が呼びに來たのだ。悲しいことだが今日限りでお別れをしなければならない」と言つて泣いた。年とつた大蛇が現はれて若者を嘗めると、忽ち彼は蛇となつて母親と共に姿をかくしてしまつた。

嘗めて蛇にされでは堪らないが、人畜を嘗む臺灣の毒蛇を拾つて見ると、その代表的なものでは先づ百步蛇。百步廣、百日

黄とも云ふ由。その名の示す如く行くこと百歩にして毒に倒れるといふのである。まさか噛まれて、一步二歩と數へてそら百歩だと言つた物好きな人間も居ないだらうが、それほど強烈な毒を持つてゐる。蛇の方ではなに五十歩で倒して見せる自信を持つてゐるかも知れない。

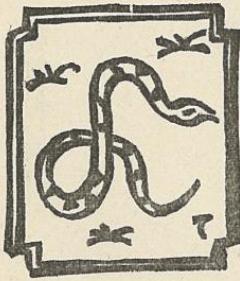
青竹絲。臺灣府誌に、長二尺色青如竹故名、とある。毒に似合はないやさしい名前である。臺灣山地に最も多く見られる毒蛇。印度半島、支那、馬來、ノイリッピン等にも多い由。

龜殼花。琉球地方の「はぶ」である。本島では青竹絲に次いで多い。黃色又は灰白色の鮮明な斑紋がある。物の本に有文如龜紋である。これも柄に似合はない優美な名前を持つてゐる。

赤傘仔節。七十種を越えない小蛇。體細く、圓味を帶びてゐる。表面は紅褐色で三十六の黒色横帶を環らし帶縁は白色。

雨傘節。簾箕甲とも云ふ。臺灣府誌に、簾箕甲蛇之最毒者。大者數尺。身有橫紋。黑白相間。俗名手巾蛇。甲有毒汗。經行處草木皆萎。牛馬不食。畠人數十步立死云々と見えてゐる。

傘蛇である。これも臺灣に多い。體は肥大。この蛇は夜遊びをする癖がある。平生は土中又は樹下に棲息し、人家内に入つて來ることもある。全く招かれざる客である。その毒はコブラよ



川合三良

臺北榮町の雨

榮町に雨が降る。

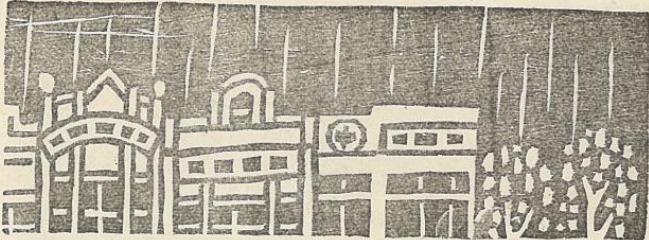
ここに雨期の名残り、燃える夏を説く雨。

利休ねずみの雨ならず、白く光つて昨日も今日もまた。

鋪道は黒く濡れて、ベタベタと、バスのタイヤが叩いて通る。白いズボンの裾がいたいたしい。

夏は夕立神鳴る雨。

山にかかる黒雲が、ぐぐうとひろがると、秋めく冷たい風が鋪道をさつと掠めて、遠慮會釋もあらばこそ、瀧なして、路を、窓



を、屋根を叩きつぶす雨に、榮町はただ白く煙る、煙る。

これは雨のジャングルが。

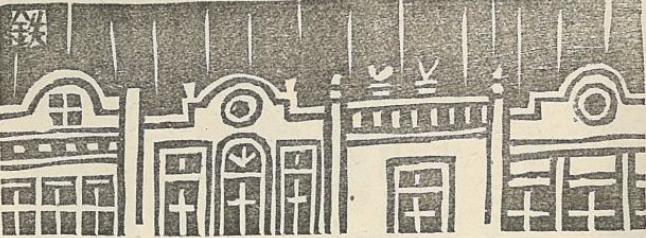
押しのけかきわけ走るバスの窓に、ちぢこまつた乗客の姿もうつらず、拖車さあらわは亭仔脚に身震ひしてゐる。

冬、つづく雨期 榮町は憂鬱だ。

仕方がない、本屋で立読みしよう。

豆コーヒーが香りうすければ、傘を預けてデパートの、そぞろ歩きがせめてもか。

雨の降る日、この町の亭仔脚ていじやくはありがたい。



高砂族の民藝



七八年前に臺灣の山を歩いたことがある。羅東からビヤナン鞍部を越え霧社へ出た。その時、高砂族の生活する様子をいくらか知ることが出来た。山の暮しにふれたのはそのときりである。やはりその頃、臺灣に博覽會があつて、その時、山から降りて來た山の生活者の盛装ぶりを街なかで見たことがあつた。實に美しかつた。今でも夢のやうに思ひ出すほどである。

高砂族の生活用品は、博物館や大學の土俗人種學の陳列品に澤山あつて親しんでゐる。

物の様式化がなかなかましい。布の模様にも木彫にも魅力を感じさせるものが多い。造型本能が可成りすぐれてゐる

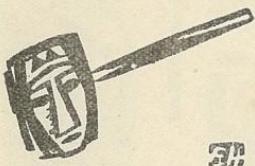
る。

捕縫は、一つは布の模様から摸したもので、踊つてゐる人間らしい。一つはバイブで、顔が彫つてある。單純直明で快よい。

蛇の模様が多いが、百歩蛇の渦巻型になつてゐるものなど、殊にいい。

もつとも、さういつまでも厭きずに見られるものではないと思ふ。特別な關心からなら別だが、普通の氣持では、或程度の美しさ面白さを感じたあとは厭きるのが本當であらう。

立石鐵臣



阿 里 山

阿里山は月の夜にかぎる。
月の夜を選びたまへ。

原生林も。
塔山も。

月の夜ならば一しほ。
神さびて大古さながら。
更けゆく月の夜。

雲は湧き。

雲は流れ。

雲は鎮まりて。

月下に雲海をつくる。

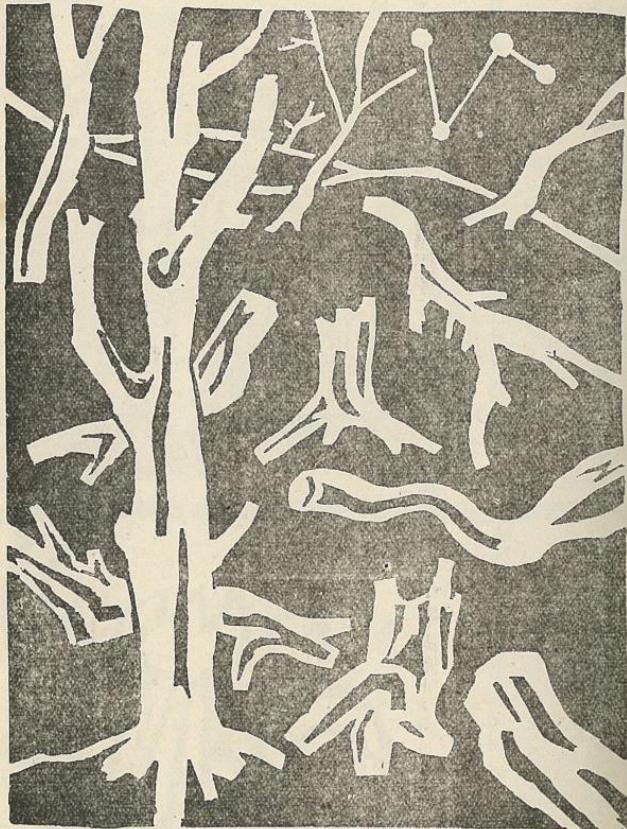
月下的雲海。

一聲啼くものどり。

月の夜をこそ選びたまへ。

阿里山は月の夜にかぎる。

西 川 滿



料理の聚落

淺草のやうに顔のかくれるのれんはない。

むき出しの屋臺がすらり並んで、裸の電灯があかあか

と強い。

蒸し焼にされた家鳴の死體、ゆで上げた豚の足には爪

がついて、膀胱が水に漬かつてゐる。

蝙蝠、これはワンタンだ。

ふかのひれ、臺灣粽、鰐巻、潤餅。

一杯五錢のミルク、二錢の冷たい果汁もあれば、白餡

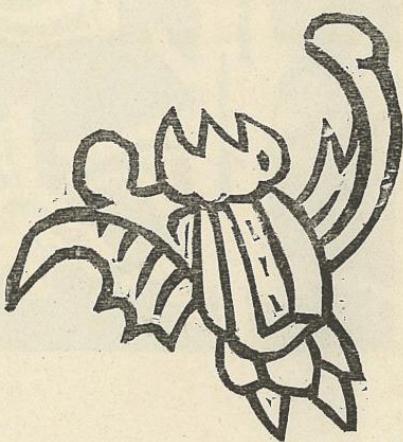
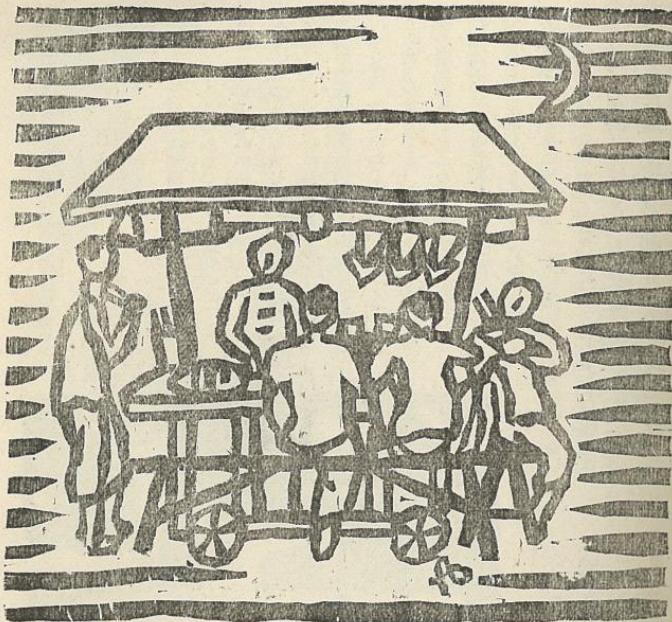
の老爺が、灯の下で伸ばせば五尺六尺と、危く地面に垂れさがる白餡を作つてゐる。

ただただに食ふもよし。
此處に沸る食欲は、臺灣の南方的生活力の爆發だ。

酒は、金鶏、黃鶏、虎骨酒、さては赤い金蘭に、夏ともなれば、樽に溢れる麥仔酒――

「本島庶民料理の聚落」――此處で賣る皮つきのままゆでた南京豆のやうな顔をして立石鐵臣が命名した――は臺北

では、萬華は龍山寺前、祖師廟前、大稻埕は永樂町市場に、江山樓前、そして日新町だ。



日新町は角公園と云ふ。

去年の春までは、すぐ近くの丸
公園にあつた。

榕樹でかこんだ丸い公園から五
本の街路を放射して、公式の名は
臺北自治行商組合圓環夜市場
アメリカ奴とイギリス奴が、生
意氣に挑戦しだしてから、公園が
防空壕野水池になり、移つた先が
角公園といふわけ。

臺北の内地人は、丸公園なん
て、と汚ながるが、この頃は細長
い床几に腰を下して、頭上の月を
美しとする風雅高潔の士が多くな
つた。

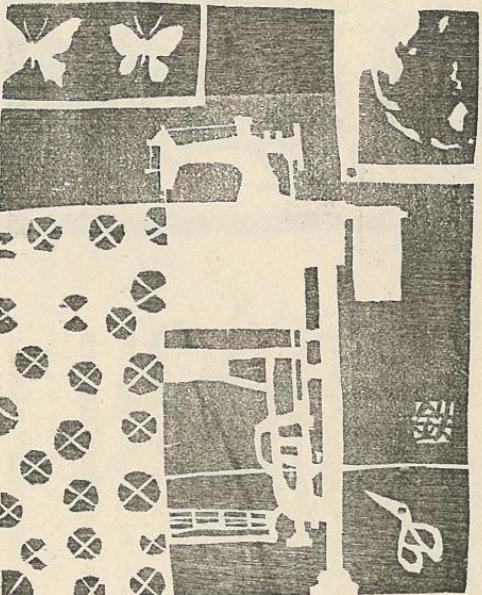
月のない夜は、空近く降りた星
がまたたく。

看

板には公認彩龍洋裁所と達筆で書いてありました。靴屋と薬屋の間にはさまれた狭い部屋の中からは、ミシンを踏む音が耳に聞えてみました。

玉蘭はも一度看板の字を見直して、おづおづと入つて行きました。突然頭の上で今日は、離ですかと聲がしました。びっくりして上を見ますと、止り木につながれた一羽の鸚鵡がきよどんとほげた顔をしてゐました。生れて始めて物を言ふ鳥を見た彼女は、珍らしさうにじつと見上げてゐました。

「まだですか」その鳥は洋裁の先生の口真似をして舌打をしました。玉蘭は思はず自分が叱られた様に首を縮めました。鸚鵡はすまして、今度はかたかたと、ミシンを踏む音の真似をしました。この鳥の方がよほど私より國語が上手だと思ふと、彼女は



よけ口が利けなくなつてしまひました。

家が貧乏な彼女は國民學校を出るとすぐ内地人の家の女中奉公に行きました。その家の奥さんは、氣が向いた時は、臺所の仕事を何から何まで自分ひとりでやるのでした。そしてまだガ

スに火のつけ方も知らない玉蘭を、ほんやりつつ立つてばかりゐないで手傳ひなさいと叱りました。おどおどして彼女は、お皿をよくこわしました。さうかと思ふと奥さんは、一日中玉蘭

に臺所をまかせきりで、自分は何もしないことがよくあります。そんな時には、氣がきかなくてお湯一つ沸せないとぶつぶつ言ひました。玉蘭には奥さんの小言の意味がよく通じなくとも、叱られてゐることはよく分りました。こんな働きのない彼女ですから給料は僅かしか頂けませんでした。一月半ばかり経つて、悪いとは思ひましたが、ある朝早くまだ家の人は寝つ

く許氏葉先生は小さい時からミシンを踏み、その上東京で三年間もみつちり洋裁の勉強をして來た人でした。きれいな若い先生ですが、仕事の上では中々やかましく厳格でした。又熱心な國語常用者で、生徒達にも絶対に本島語の使用を禁止してゐました。だからここに伺はれてゐる鸚鵡も、お話をする時は全部國語でした。

玉蘭は早く先生の様に洋裁も國語も上手になりたいと思ひました。そしていつかは自分が洋裁の學校を開くことを夢に見ながら、一週間に二度、奥さんにお腹を貰いて、ミシンを一生懸命に踏んでゐます。

もう彼女は鸚鵡なんかには少しも驚かなくなりました。



牡丹と雲

牡丹は、王者の花と云はれるが、どうしたわけか、臺灣ではあまり見かけない。

牡丹と蟻は、日本書家のよく描く畫材だが、蟻の多い臺灣に、牡丹がないのは、牡丹の方で蟻を敬遠したからであらう。

だが、この富貴な花のない代りに、臺灣には素晴らしいものがある。

——それは雲だ。

臺灣の雪の美しさは、牡丹どころの比ではない。

瀬戸内海の雲、京都の雲、名古屋の雲、東京の雲、高田の雲、水戸の雲、會津の雲と、雲を眺めて旅をしたが、未だ臺灣の雲に匹敵する雲を不幸にして私は見たことがない。

私が臺灣に住み、臺灣を愛するのは全く雲のせいである。

雲くらゐ同じ姿を嫌ふものはない。端倪すべからざる藝術家——それは雲だ。雲は不斷に己の姿を變へ、己の色どりを變へる。

しかも臺灣の雲は、内地の雲に比べて、一層、千變萬化ぶりを發揮する。試みに日々刻々の雲のうつりかはりを記録してみたまへ。如何に樂しく、また如何に心打たれることであらう。

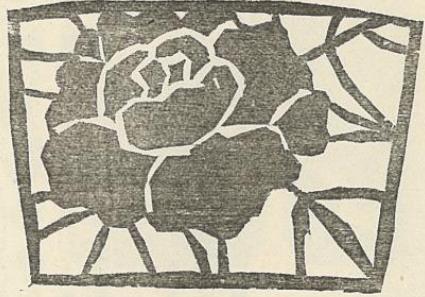
私の最も好きな雲の一つ、それは曇り空、日を孕んで眞珠色にかがやく、あのうつくしい沈潜した陶器のやうな雲である。

臺灣に旅する人は、旅館の窓から、うつろひゆく雲の姿を眺めるのを、忘れないで欲しい。

西川満



—(45)—



—(44)—

民家の正廳には必ず上から天公爐がつるされてゐる。これは玉皇帝を祀るための香爐で、信心深い家では朝夕に、一般には一日と十五日に線香をあける。天を人格化した玉皇上帝は諸神の最高位にある神として最も畏敬され、そのため殊更にこの神様に限つて民家では神様を祀らずに、ただ爐を一段高い所に設へて禮拜する。

玉皇帝の誕生日は正月九日で、この日の夜明け、各戸では祭壇を設けて、長上の者より三跪九叩の禮を行ひ、その間樂人を招いて吉祥の樂を奏せしめ、最も嚴肅な祭祀を行ふのである。



天公爐

四季を通して麗はしい花に恵まれてゐる臺灣の明暮は、花賣りが香氣ゆたかな季節の花を花籠に入れて菴をまはる。これらの花は本島婦人が、女の身だしなみの一つとして頭髪の髪飾りを飾る花簪になるのである。花簪に使用される花の種類は十數種に及んでゐるが、月下香、茉莉、樹蘭、玉蘭、芙蓉、夜合、素馨、含笑、鶯爪桃、馬蹄花等、これらの花の清らかな色彩、可憐な形態はもとより、花の含んでゐるほのかな香氣は、婦人の黒髪を飾るに相應しく、情緒ゆたかなものがある。



花簪

池田敏雄

志願兵

——本島人青年に代つて詠める歌

兵隊になれる

日本の兵隊になれる

君が 君が 君が

そして僕が――

ああ 臺灣に志願兵制度施行さる！

僕の血は湧く

僕の血は湧いて迸る！

今こそ 僕らが

身も たましひも 舉げて

日本人になるときが來たのだ！

海行かば水漬く屍

——僕らの 志願兵

山行かば草むす屍

——僕ら待望の 志願兵

ならう 今こそ

君も 君も 君も

そして僕も なつて征かう

陸に 海に 空に

太平洋は亞細亞は

南の美しい島々は

僕らの来るのを待つてゐるのだ！

大東亜建設のために

今こそ僕らは共に銃を執つて

大君の醜の御橋とならう

ああ 僕ら榮光の臺灣志願兵



白鷺と烏秋

臺灣へ始めて來た人々の目に、先づ物珍らしく映るのは白鷺の多いことであらう。汽車の窓から、田の中へ下り立つてゐる姿や、とんでゐる様がよく見受けられる。平凡な鳥ではあるが、臺灣の風物の中には、とにかく御出場を願はないと、一寸歯の抜けた感じである。

純白な羽色、長い頸と長い脚、鋭い槍の様な嘴。この嘴で魚、蛙、蛇、トカゲ等をつきさして食ふ。

以前にヘロンといふ兩切煙草があつた。今は白鷺と改姓名をしてゐるが、この方が如何

鳥仲間では槍一筋の侍の家柄かも知れない。

にも臺灣の煙草らしくいい。

烏秋オオサギは烏鵲とも書く。俗に言ふ臺灣カラスである。内地のカラスに比べて少し小さい様である。色は勿論白鷺と正反対の眞黒である。體の割合に尾が長い。

臺海采風圖に「烏鵲似八哥。而通體皆黑。喙如錐。尾長飛最疾。鳴如黃鸝。……夜則隨更遷喚。能搏鷹鶲……」とある。

烏秋は喧嘩好きであり、惡食家である。度々小鳥類やその卵を襲撃する。

どうやら鳥仲間での憎まれものらしい。

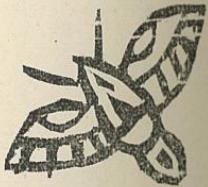
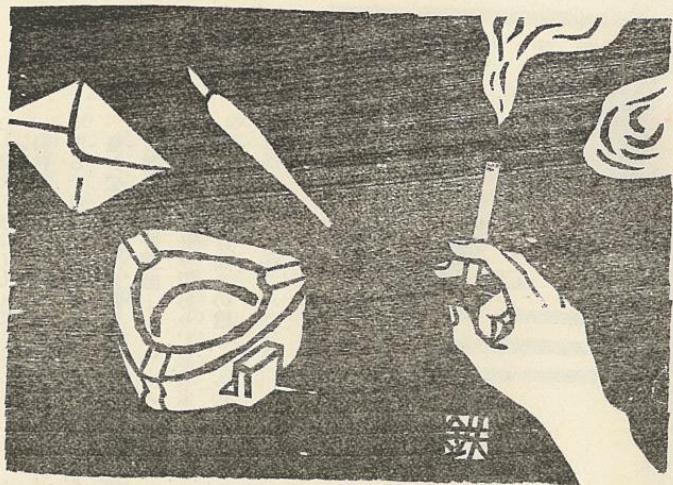


川合三良

むかし、赤ジャスミン、青ジャスミンといふ、赤い箱、緑の箱のうつくしい煙草があつた。青の罐入りなど、蓋をあけると、香りが濃くて、わたしたちはしみじみと臺灣を感じた。レッド・ジャスミン、今は「曙」。こないだから十三錢。第一ジャスミン改めて「南」二十錢。ヘロン改め「白鷺」となれば高級で二十八錢。葉巻は「新高」、「大屯」と煙も立たぬ山の名を借り、島人の吸ふ刻みは「白菊」「水仙」「玉蘭」油つこく安いが取柄か。山の高砂族は手巻を吸ふが、パイプは美しい。

朝日敷島萩白雪、と内地煙草は老人が細々と吸ふ。

大稻埕で、老爺の持つ長煙管、水煙管ものごろはなかなか見受けない。



赤 嵌 樓

門をくぐつて、紅毛井の傍に立つと、忽然として右手に文昌閣が、真紅の日輪を背景にくつきりと浮かびあがつてきた。私は呼吸をとめた。それはちやうど正に倒れんとする巨人が最後の力をこめて立つくす、あの悲壯な美しさにも似てるた。しかもざわざわと騒ぐ柿欅や、樹齡を重ねた榕樹の梢の動きにつれて、たしかに樓全體が息ついてゐるのだ。屋根を支へる細い圓柱も、とざされた鏤骨の窓も朱にあへいで、陽炎が苦しけに立ち昇つてゐる。

光のたぎる蓬壺書院の跡から、階段を踏んで樓上にあがると、内部はほの暗く、がらんとしてるたが、毀れかけた一脚の机が置かれて、その上に斗を指し、片足を擧げた、かなり時代味を帶びた鬼の像が祀つてあつた。正しく文章の神、魁星爺である。その眼玉はとれてむなしく眼窩が現はれ、像全體が埃にまみれてゐた。詣づる人もないからであらう。香爐すら置かれてゐない。

私はそつと鬼の前を離れて、歩廊へ出る扉を押した。軋りながら二つの扉が聞くにつれて、眼のくらむばかりに跳びこんで来る真夏の灼けるやうなおびただしい光、そしてその光を反射して連る民家の甍と、處々に屹立する寺廟の反りかへつた屋根屋根。ああ、蜃氣樓のやうに美しい、古い城市の風光よ。

欄干に凭れると、遠くに海が見える。あの海が、昔はこの樓のすぐ下まで來てゐて、怒濤が逆巻いてゐたのだ。そして一代の英傑、鄭成功が、その頃の赤嵌樓、つまりプロヴィンシャ城を攻め落して、蘭軍を降伏せしめたのだ。

私は眼をとじて、高祖彭の詩を口ずさむだ。

百尺高樓鎮海東。夕陽斜映滿城紅。分明繪出皇圖壯。想見當年汗血功。



歌仔戲

アセチレン燈の明りのかけに

すすりなく花の娘よ

銅鑼や胡弓の中に混じる感傷も

夏の夜のひとときの夢か

否、うつづに今こそ舞ひ舞ふ我がかなしみ

花籠を置いて、花を撒けば

客の中には歯のかけた老爺がるる

裸足の小供が居る

やはり人ごみの向ふには物賣の賑やかさ

群集のなかをわめいてかけぬける

宿なしの少年は小魚のやうにすばしこい

夜はふげてしかもなり止まぬ樂の音よ

ああ

「夏の夜に何かかなしき芝居かな」

新垣宏一

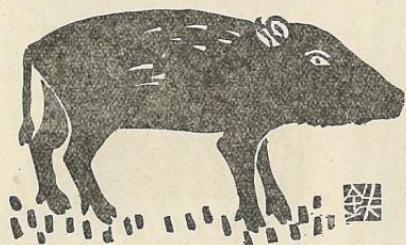
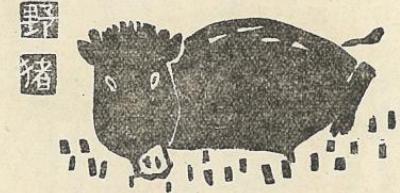
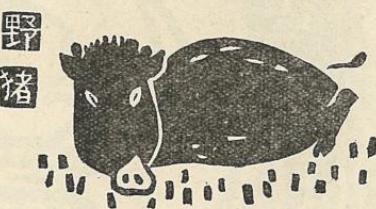
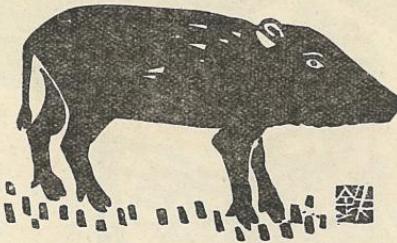


—(56)—

—(57)—



野 猪



ここに描かれた野猪は、臺北

市動物園の第二十三番舎に居る

ものである。れつきとしてゐる

ものである。が、どうも人々に

強い印象を残さぬらしい。二十

三番舎の前には、いつもあまり

人足が止まらない。岩石の一つ

に間違はれてしまふのだろう

か。ここに同種のものを二通り

も出したのは、さういふ野猪の

印象を少しでも強めるためであ
る。

野猪は私たちの認識してゐる
猪のやうに大きくもすごくな
い。小さくてとほけてゐる。し
かし偶蹄類のれつきとした顎で

ある。

しかもこの獸の安坐する姿を
よく見ると、愛する臺灣島の恰
好に似てる。無視してはいけ
ない。

長衫

長衫は臺灣獨自の衣服である。

もとは支那服から起つたにしても、あれとは型が變つてゐる。大稻埕の背の街をコスモスのやうに、三々五々逍遙する風情はいみじくも美しい。

それに若い女たちは中肉中脊の恰好な姿が多く、長衫の生命がすつきりと活きてゐる。

長衫の外摩は極めて單純な線でありながら上から下に流れるかと思へば淀み、淀むかと思へば急轉して美しい弧を描く。と云つた形容がそつくり當缺められる。だから、單純であればある程微妙な氣分を誘ふ。それに色合まで極めてデリカシイが働いて、あの油濃い食物を探る土地柄にもかかはらず、純白、淡紅、淡青磁、白群等の單色が好まれ、凡そけばしばしさとか俗惡なものはべもなく排斥される。さうした淡い色彩が織り成す雰圍氣は夏の真盛りであつても清々しく涼しい。

それに長衫は兩脚の下方半米突餘りが開けてあつて、活潑に歩く自由が許されてゐるから、長い下脚が日本服の蹴出しのやうにサッサツと現はれて、全くいい。

頭髪は昔からの慣習がさうさせるのであらう。たんねんに梳つてゐる。それは清冽な泉の落ちかかる風情に似て、頸のあたりまで一氣におろし、その尖端を波立つやうなカールで納めてゐる。

靴はサンダルとかウエッヂソウルと云ふ踵がつま先まで延びたものが愛用される。履き心ちが極めていいさうである。

別に、上衣と下袴との組合せによる大裾衫と云ふ昔からの衣服を着てゐる地方もあるが、これは獨自の素直さもある。て、一寸乙なところはあるものの、後姿が頗る野暮で嫌な感じを與へる。



宮田彌太朗

—(60)—

—(61)—



甘 蔗 に

たかだかと甘蔗の穂波は揺れてみる

朝霧や甘蔗煙もおぼろにて

甘蔗積んで朱柄の牛車暮をゆく

陽に入るやそよとも搖れず甘蔗穂原

暮れ殘る甘蔗の穗高し冬といふ

甘蔗の穂のそよぎつ雲は遠白き

甘蔗を噛む農婦の膝の秋陽かな

甘蔗の葉のさわさわとして空は秋

甘蔗の穗に青ひといろの空高し

風鳴るや甘蔗の穂原はただひろし



濱田 隼雄

—(62)—

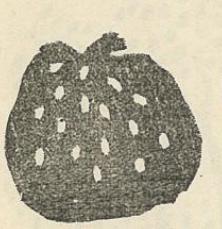
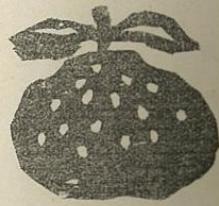
果 物 の 歌

楂柑の味をおほえし我が子は名をも覚えてせがみてやます

己が頭より大きいほどの白柚を抱へきし子をほめて皮を剥く

手にとりし鳳梨の膚いかめしくその充實感を我はたのしむ

名を聞きて久しくありし蓮霧を噛めば林檎に似てすががし



鉄

—(63)—

そのにほひ臭しといひて喰はざる人を前にして木瓜の甘さ

まだ稚く小さき實を持つ房ながらバナナは明るく太陽に向へり

庭にころがり落ちし龍眼を一ついねむとしつふと思ひ出したり

白き肉の汁したたらせて荔枝のまんまるき實をいくつ食ひけむ

名を聞きて久しくありし蓮霧を噛めば林檎に似てすががし

庭にころがり落ちし龍眼を一ついねむとしつふと思ひ出したり

まだ稚く小さき實を持つ房ながらバナナは明るく太陽に向へり

相思樹

「ああ、これが相思樹ですか」
たいていの人が、さう云つて、案外な顔付をしながらもう一度、
細い葉の相思樹を見直す。

それほど相思樹は、臺灣のどこにでもある。素直な樹木である。
榕樹のやうに、もつたいぶつて身體をひねりもせぬし、かと云つて檳榔のやうにとりすまして眞直につつ立つてもゐない。

あるがままで、西に東に、北に南に、すぐすくと伸び、枝は右と左に別れ別れて、眉のやうな葉をつけてゐる。

西洋のバタクさい戀愛はいき知らず、本當の相思と云ふものは、この樹の如くつましく、かそけく、素直なものであらう。

花咲く季節にはホロホロと黄色い雨のやうな花を降らす相思樹。
カタコトとすぎゆく牛車の上に、一ひら一ひら落ちてくる葉。

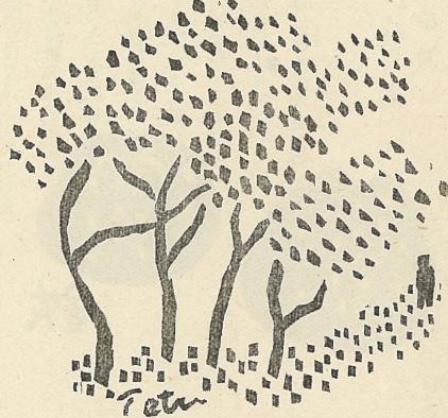
「これがね」

期待を裏切られたやうに呴く旅人に、私は肩をそびやかして答へる。

「さうですよ。何と美しい東洋的な樹ちやありませんか。簡素の中の美しさとは、この樹のことですよ。それに相思に燃えて身をこがしても他人に迷惑をかけるどころか、立派に薪炭となつて國策にも協力してゐるのです」

「へえ、これが炭になるのですか」
旅人は三たび相思樹を見上げる。するとさやさやと南風に葉をゆすつて、相思樹は、キラキラした光をおとしてくる。

西川満



—(64)—

大屯火山彙

臺北に住んで、朝夕、心をなぐさめられるのは、大屯火山彙である。
大屯、小觀音、面天、七星と、この一連の山の、なだらかな、しかも雄々しい姿は、いく度眺めても倦くことを知らない。

晴れた日の大屯火山彙。

曇り日の大屯火山彙。

雨にけむる大屯火山彙。

月の夜おぼろの大屯火山彙。

そしてまた冬ともなれば、いささかの雪さへ帶びる大屯火山彙。

この一連の山のおかけで、どれほど臺北の市民は、心ゆたかに生活することができるであらう。

大屯、それは一生眺めて心悔いなき山である。
大屯、この一連の山を讃へよう。

うつむいて、硝子鉢の中に、赤く垂れた尾を動かさうともしない金魚の眼をみつめてみると、南海はふとわけもなくしない氣持になつた。

オ、センチな、と心つぶやいてみても、女學校の一年からおじどりだつた奎子が、いよいよ明日は満洲に嫁いでゆくといふことが、淋しいものになつて湧いてくる。

——満洲までゆかなくたつて。臺灣にゐてよ。

とあまえてかかるのに、

——慶生の娘は、なんて云はれて、咸ばられてゐるより、ひろい満洲に、貰つて裏れる人があるんだもん。暑い臺灣から寒い満洲に行つたつて、立派に女のつとめは出来ますよ、と、他人にだやなく、自分にみせ度いのよ。

そして、
と、氣の強い奎子だつた。



灣生の娘

南

海は新公園の協和會館のテラスで待つてゐた。

青葉の繋りが、赤い金魚の泳ぐ鉢の水に、白いグラウスに、そして黒いレースの手袋にも、映えてすがすがしい初夏の午後。

約束は二時。

もう二時なのに、奎子はまだ来なかつた。

南

海は、徳川時代ぢやあるまいし、満洲だつて地球の上によ、郵便は同じ五錢だわ。

とも云つた。

——いさましいわね。

悲しみはさりげなく。あたしは侍の娘。女は結婚すべきものと知つたらさつさと/orするわ。生き度いのよ。
さう云つて奎子は顔を少しゆがめて笑つた。

かさに眼をみはつた。

白い睡蓮、彼女は初めてみたもののやうにうつとりして立ち上つた。

濱田隼雄

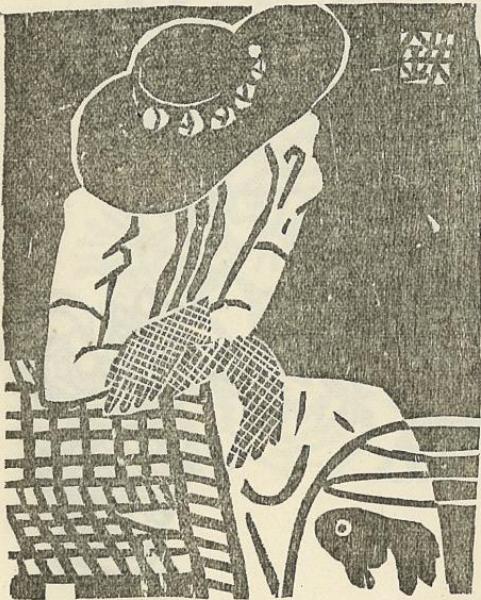
いいなあ、ああいふ性格。
思ひながら、五六度あつた縁談が、こつちがよければあちらが悪し、でまだづついてゐる自分がかなしいのだ。いやまとあつさり片づけられず、一つの縁談ことに結局自分を痛めてゐるやふな自分がかなしいのだ。

今日は最後の二人の時間だから、奎子さんに負けないくらい生き生きとした氣持で遊んでやうと構えてきたのだが、動かぬ金魚をみてみると、いつか南海は、自分が、垂れた尾は美しいし、まるい眼はつぶらだが、硝子にうつる我が影を、呆然とみつめて動かぬ金魚になつてしまひさうだつた。

形のよい眉をひそめて、南海は頭を上げ、テラスの前の長方形の大きな池に眼をうつした。

しなやかに高いゆうかりの梢と蒼い空が影を落した水面に睡蓮の葉がひろがつて、ぼつかりと白い花が浮いてゐる。

あら、と思はず低い嘆聲を發し、その清ら



鳳

凰

鳳凰は太平の世にあらはれる瑞鳥である。「鳳不朝清」と云ふ俗語があるが、これは滿洲族の清朝に降ることをいさぎよしといしない明朝の遺民の造語にかかるものであらうが、鄭成功以來明朝と深いつながりのある本島の民衆も深くこれを信じてゐるのである。

鳳凰は「如夫妻之相隨」と云はれ、従つてこれにあやかつて婚禮とは深いつながりがある。例へば婚姻の際に配ぱる禮餅の表にはこの鳳凰の模様が型で押されそれを納める箱等にもその圖案が描かれるのである。又紙片に「鳳凰到此」と記して眠床あるひは正廳の隅等に貼符すれば魔除けになると云ひ、驅邪のためにも使用されてゐる。

池田敏雄



—(69)—

—(68)—



東部斷章

蘇澳—花蓮港間の海岸の壯絶美は、おそらく東洋一であらう。
數千尺の巨いなる断崖が、いきなり海へおちこんでゐる。

象牙いろの大砾石海岸！

濃青の太平洋の怒濤は、大断崖の脚を噛みついてゐる。

花蓮港市は、ゴールドラッシュの町だ。

米倉原頭に、人口三十萬といふ雄渾なる略圖が描かれてゐる。

タツキリ溪は、砂金を流してゐる。

臺東線沿道風景

草原と石ころの溪と灌木と這ひつくばつてゐる矮屋とインデヤンのやうな
高砂族と荒涼さと。

臺東街。

海沿ひの、のびのびとした町、ひつそりとした町。

椰子は、モンスンにそよいでゐる。

馬蘭社にゆきたまへ。

黒褐の顔いろに、紅や紫を縁とりした黒い着物は、美しい南方の圖だ。

龍瑛宗



水牛

マレーの牛は獰猛で、虎よりこはいと云ひますが、臺灣の水牛はのたりの

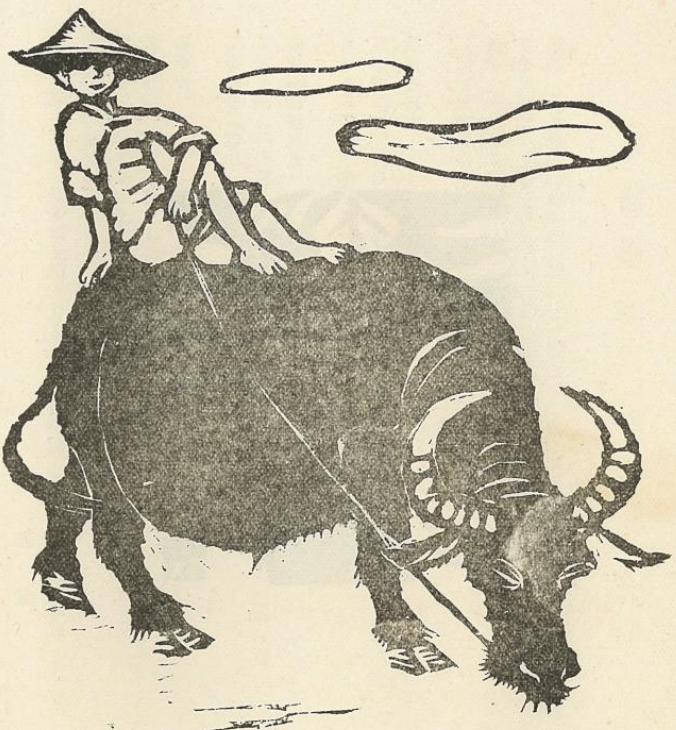
たりと年とつて肥つて女のやうです。

時々ヒスティーを起すと、角をかまへて、走りますが――

でも憚巧です。犂をひきながら、刃先が石にあたると、彼女はそつと立ちどまり、細い眼で犂持つ主人に教へるのです。

旱天に泥水の中にすつほりうづまつて、鼻穴を出してゐる彼女の水浴は、

印度人のやうに静かです。



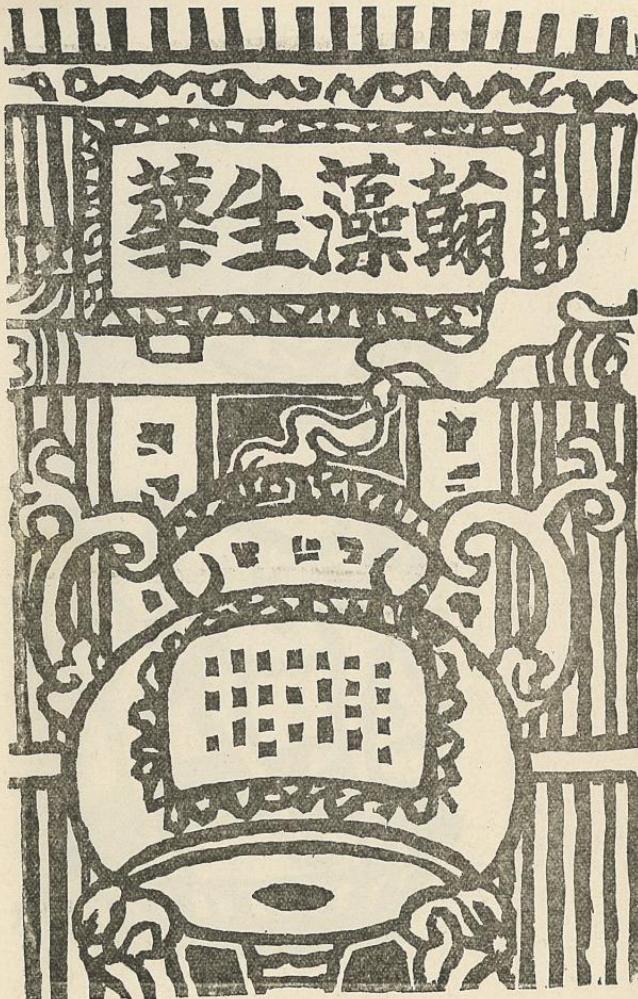
夾竹桃の花咲く廟の一隅、女たちは金亭の前にうづくまつて、小さな形代を焼いてゐた。反りかへつた屋根の、巨大な二匹の龍と三十六の神將は、眞夏の大日を浴びて、生動するかの如く息つき、覺と云ふ覺は、たちのぼる火爐のけむりを迎へて、妖しげな陽炎を放つてゐた。正に亭午。簷を支へる奇怪な童子も、横たはる唐獅子も、天人燐様の浮彫もこれらずすべてのものは、きらきらした光の中に、その五彩を奪はれ、黄金の壇場のごとくはげしくたぎつた。屋根にとりかこまれた方形の中庭で、ただ眼にしめるのは、底知れぬまでに明かるく冴えた、空の青一色である。銅鑼も鳴らず、梵鐘も響かず、しかもなほ胸迫つて聞こえくる、なにやらのもの叫び。大地の呼聲か、精靈の招きか、わたしは十方世界の光をのがれ、ほの暗い内陣に歩をすめた。香煙たなびく祭壇にゆらく赤い二本の蠟燭の灯の、なごやかさは何にたとへたらよからう。

西川満

—(74)—

天蓋の下、聖母は烏面の分身を隨へ、二魔に護られて、永遠の半眼を見開いてゐる。窮たる慈顔に藏されたこの世ならぬ微笑には、モナ・リザのそれも及ぶべくもない。東洋である。正しくこれは崇高な東洋である。靈通救世の御母よ、御身の德を、病める兒等のため形代焼く女たちに與へたまへ。内陣の奥深く、幾多の偶像、髪をおどろに亂し、舌を垂らした神々が、惡鬼邪靈を捕へむと、彩旗ひるがへる出陣の日を待つてゐる。人の童子が鼈裝の使徒千里眼の前に跪いて、なにとかを祈念し、一本の竹香をささげた。わたしは嘗て日の夢を、童子の姿の中に見出して、淡い追憶に耽つた……。ざわめきが聞こえてくる。職のみつからぬ苦力たちが、追ひ拂はれることない平安の場所を求めて、頑びに來たのだ。彼等は地へたに寝ころび、石柱に脊をもたらせ、氣ままな姿勢をとつたかと思ふと、すぐにやすらかなねむりをむさぼりはじめた。

わたしは廟を後にした。すると不思議にも、あの光輝は消え失せて、山脈の上にむくむくと雷雲が湧き、それが見る間に市井の上にひろがつて來た。



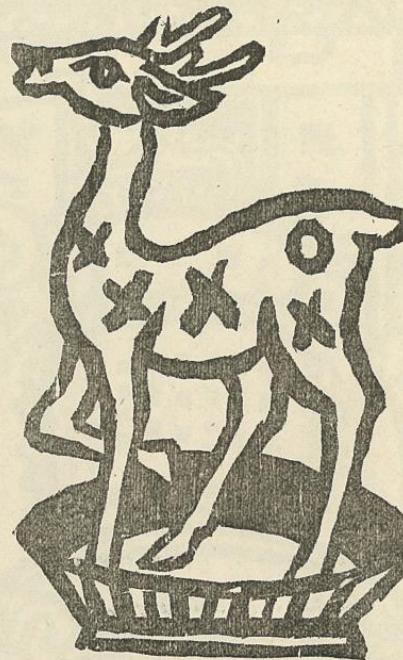


鹿

臺灣の言ひつたへに、臺灣には昔から虎がるなかつたので、鹿が多いといふことがある。昔の臺灣には全島的に鹿が棲息してゐたことは、古地圖によつてもうかがはれる。古く高砂族がこの鹿を多く捕獲したことや、その皮革は、日本人や支那人相手に交易を営んだことなどは、史實に著名である。

だが現在ではあまり見られない。東部臺灣にはぐくわづかばかり棲んでゐるやうである。『花鹿』と呼ばれるこの鹿が、夕暮の山裾で哀音を發して泣く聲は、ほろびゆく可憐な動物への感傷をそそる。

臺灣の風俗に家の入口に赤い紙に字を書いた聯を帖つたり、門神の圖を畫くことがある。その門神の一種に「加冠」（晋祿）の圖があつて、冠を手に捧げた者と、鹿を皿に入れて持つてゐる神像が見られる。『祿』と『鹿』の字音が通するからであらうか。めでたい動物である。



移民村

總督府が自ら移民事業に着手したのは明治四十二年である。しかし、満洲移民のやうに華やかなものではなく、東部の花蓮港附近に、吉野村、豊田村、林田村と、ささやかな村を作った。

爾來三十有餘年、一時は中越の苦境に陥りながら、彼らは強烈な南方の光りと熱に耐え、マリヤの暴威と闘ひ、毎年に荒れ狂ふ颱風に抗して、臺灣島の土に生きてきた。

南方新領地への農業移民が、日章旗と共に日本農道を前進せしめんとする時、臺灣での三十有餘年の経験、改めて高く評價される筈である。

吉野村

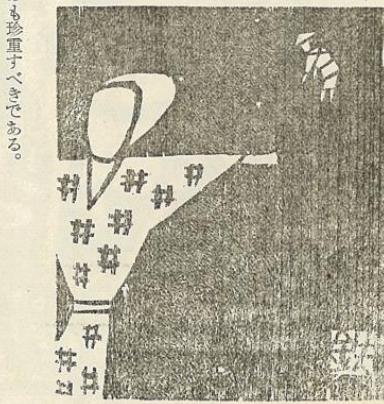
この村は官營移民村の大先輩である。大正初めの大旱魃で、米もなく鹽もなく、窮乏のどん底を這ひましたが、今や完全に自活し得て、訪れる観察者は、清潔な街路とのつた農家、そして完備した產業組合、郵便局等のモダンな姿に、南格にある日本ぶりを、微笑ましく眺められる。

旭、美和、大原、月野、池上、沙山村

これらの村は、立地條件の不利、親會社の不況によって、鹿野の如き、今尚窮境を脱し得ない。

移民事業は官營たるべきか私營たるべきかの問題に解答を與へてゐる。

それにもしても、南方の水なき砂漠地を拓き、初めての甘蔗を栽培し、じつと苦難に生きてきた鹿野の、新潟出身の農民たち



—(78)—

には心からの敬意を表わねばならぬであらう。

沙山村

臺中州下にこの村が作られたのは昭和も七年で、まだ新しい。それだけに、自治的組合を設け、農事傳習所で、一箇年の教育期間を置き、共同耕作をなしつゝ、本島農業經營上必須の智識と體験を磨かせる云ふ方法は慎重であった。

甘蔗と米とを作つてゐる。

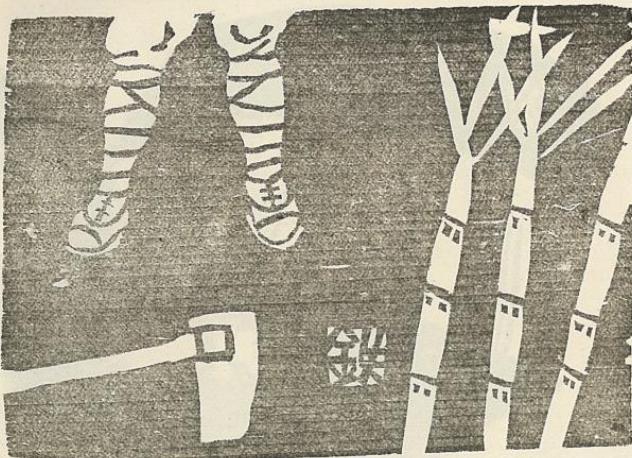
日出村

高雄州の下淡水溪が治水工事の完成によつて生み出した新生地に開設された、種草を作る村である。うだるやうな暑熱、マリヤ等の悪病に、相當の苦しみを経てきてゐるらしいのは注目に値する。

築村

臺南州立農業國民學校、嘉南塾が作り上げた村で、發展途上にある。

旅人は、満洲移民より前にこの臺灣島に日本の農民が渡つてきて、亜熱帶の太陽の下に、暑熱の立もこめる土を拓き、生き抜いてきた歴史を、臺灣在住の官吏や會社員たちは、同じ母國からの農民が人知れず、不平も云はず、ただ黙々と鍼を振つてきたことを、心からの拍手をもつて思ひみなければなるまい。



—(79)—

牛

車

南部に行つて心魅かれるのは牛車である。

南部の牛は、皆首に鈴をつけて、シャンシャンシャンと、いかにも楽しそうに鈴を鳴らして歩いてゐる。

誰がはじめたのか、また、いつの頃からはじまつたのか、それは知らない。

けれども南部の牛のあの鈴の音を聞くことは、しばし浮世の塵を忘れさせる。

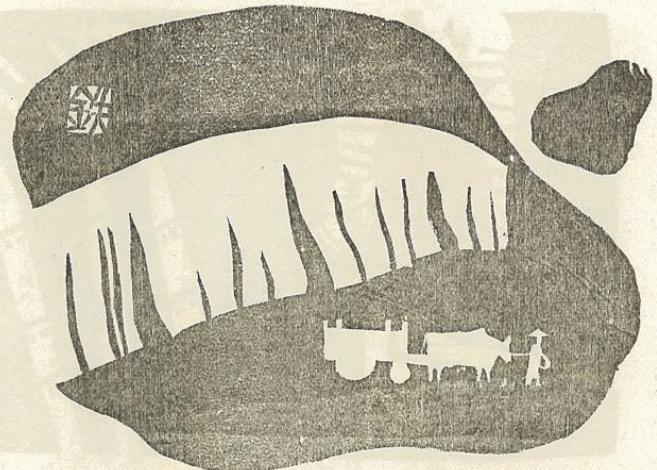
釋尊の説かれた話の中に、大白牛車に鈴かけてと云ふのがあるから、南部の牛車は、自ら大聖の心にもかなつてゐるのであらう。

風に揺れる芭蕉の葉蔭を、車ひいてすぎてゆく黃いろい牛。

眞赤な鳳凰木の並木の下を、餘韻のこして歩んでゐる眞白な牛。

牛が神聖だと印度の感情は、南部に行つてはじめてわかる。

西川満



竹と民家

汽車の窓から眺めよう。

田んぼがあると、必ず家がある。

家があると、必ず竹やぶがある。

竹やぶは、むかし、匪賊を防ぐ壁であつた。

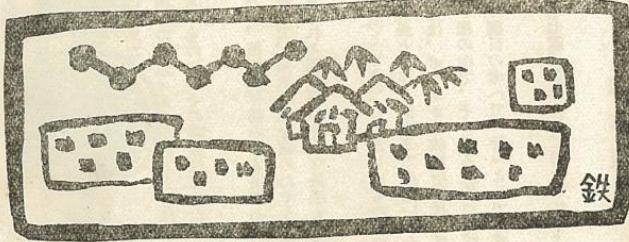
竹やぶは、また風や地震を防ぐ天然の壁であつた。竹やぶは、そして、日常のもうもうの器具をつくる原料でもあつた。

竹やぶに、囲まれた民家。

民家を囲んで、さやさや搖れる竹やぶ。

「竹園」と云ふ地名は、臺灣に非常に多い。

西川満



白手長猿と猩々

鯨が鱗を吹き上げてゐる動物園が無いかぎり、森の人猩々の
居る臺北市動物園は、世界第一級の動物園に列することが出來
さうに思へる。

白手長猿の身體は、そろそろ打ち直したい綿のやうで、そこ
に、顔・耳・掌・蹄・尻が、黒くタッキリと置かれてある。顔こ
と尻とは同じクローバー型で、首尾の統一がとれてゐる。

彼の住居は、猩々殿の横にある樹上に高い。それから十米程
先の枝を拂つた太い枯木へ、恰度彼の身長の間隔に、上下に平
行する二本の鐵線が渡してある。天氣が良いと、彼はそこを、
直立してスタート歩く。彼の首に結ばれた鎖が、環で上方の鐵
線と通絡がつけてあるが、その環を左手で持ち、右手を前に擧
げながら往還する。その極りボーズは、上司の命令で何かの配
達作業に、貧賤を貰つて永年從事してゐるかのやうだ。

その忙中の閑暇に、彼は各種の趣味を見せててくれる。蝶の蒐集
もその一つで、採りそこなふと、彼の身體はグルグル廻り、
青空をバックに、顔と尻、手と足とが入り亂れて、それらをさ
だかに區別しがたくなる。自身、さうした興奮と失敗との後で
は、時間遡へることがあるらしい。

もし此の動物園で、何かの記念メダルを作るときは、必ず
猩々の圖案であらう。挿入のものは、その時お役にたたないだ
らうか。

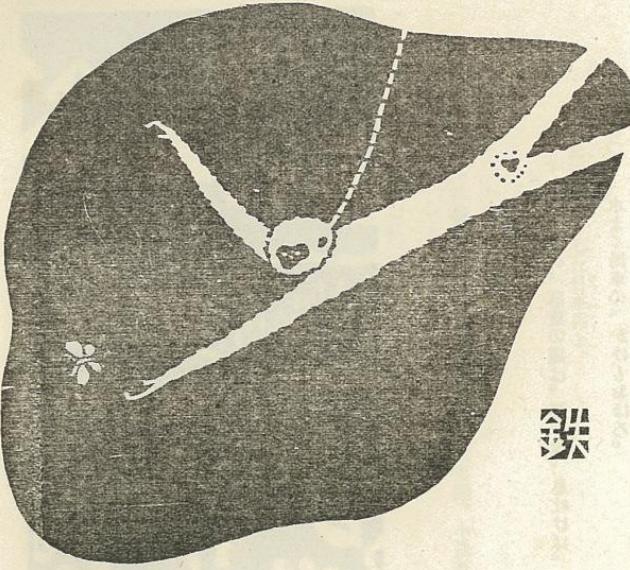
「動物園寫眞帖」を見ると、彼の八年前の姿も出てゐるが、
その頃の風采は可成り當識的で、滿天の星を鏽めたやうな漆色
の脛煩も、ゆさゆさ一米も垂れる纏暖簾のやうな長毛も現はれ
てゐない。

けちくさいもの、もつともらしいもの、こざかしいものを頭
身につけず、露骨に怒り、爛漫と舞ひ、何處まで奥深いかわか
らぬ顔で坐る彼の無類の造型は、ボルネオの故郷を離れ、見る
生物とては人間の他には無い檻の中で、その見る生物に媚びず
その眞似をせず、まつたくの獨自の考へで、贅々として完成さ
れたものである。

彼の體化名は一郎。本年十七歳。猩々として獨身である。

立石鐵臣

□



斗六旅情

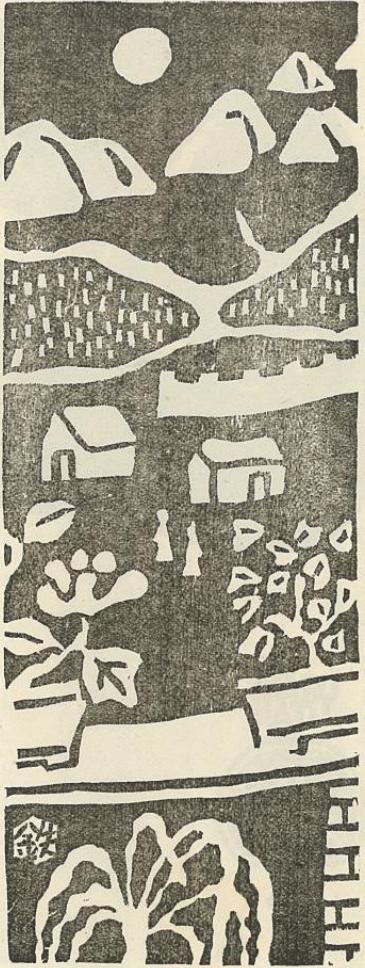
うすら明かりの。落葉の道は。深い霧。息吐けば。白くけ
むつて。水まく馬車の。かけもおほろ。

斗六大橋。^{とろく}めば。霧の中。たち昇る砧^{ぬた}の音よ。うら若き
女^{めの}らの。髪にさした月來香^{つきらいこう}よ。

頬にふれる。南蠻さいかち。まだ眠る養賓閣。小蓬萊。去

りがたき思ひに。ただひとり欄檻に凭れて。

川岸を。霧がくれ。ゆくは山羊か。賣られゆく牛か。陳林^{ちんりん}
氏の館^{やかた}の彼方。曉方の月もけむる。



廣くもない街だが、いゝ刑事がてくてく歩いてゐた。

が王になつて流れた。

市場のある通り。眞晝時の停仔脚の中にも人は動かない。

一軒の寫眞屋の前で、彼はふと立ちどまつた。

粗末だが飾窓がある。いつも見馴れた窓飾がある。

書の巡査異状なし、かと思ひながら街のただ

一軒の寫眞屋の前で、彼はふと立ちどまつた。

粗末だが飾窓がある。いつも見馴れた窓飾が

ある。

そこが飾り替をしたのに氣づいたのだ。

そして、郡役所の警察課長の、びんと伸びた鬚が、肩章の

上にいかめしい寫眞に、ほほうと感心して、鬚のない自分の鼻の下を指でさすつてゐるうちに、いゝ刑事はまた、警部の寫眞の下に、田舎藝妓と並んでモーニングを着た男の写眞がすまし

んでゐるのに氣がついた。

——誰だすましやがつて。

狹いこの街には見ない顔だ。殊にモーニングなどを着るのはきまつてゐる街だ。

角刈にボシャボシャ生えた髪の、せまい額に眼は細い。

——誰だい。

いゝ刑事は、よく効く腫をこらしてじつと見知らぬ男の顔に見入つた。

とたんに、彼は刑事であつた。隣りの郡の警察課から移譲してきた盜難事件を思ひ出した。

たしかにモーニングもあつた。白いチヨツキの襟に、眼につくしみがあるといふ。

彼はみた。黒い襟からわざかにのぞい、チヨツキの襟に、田舎の古ぼけた寫眞器でもつかまへられる黒い汚點のあることを——

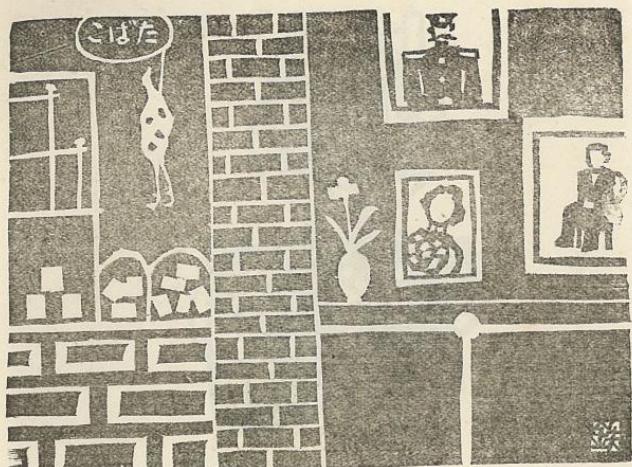


泥棒の話

らぬ男の顔に見入つた。

とたんに、彼は刑事であつた。隣りの郡の警

—(86)—



田舎藝妓の丸ぼちや顔がにやつと笑ひ、ろ警部は苦蟲を噛み

つぶした。

——畜生、ふざけやがつて、のはほんと写眞まで撮してけつ

かる。

いゝ刑事は、口をきつと結び、眼を鋭く光らせて、写眞屋への階段を、がたがたと登つて行つた。

隣りの煙草屋では店番の、継足をした老婆が、こくりこくり眠つてゐた。

燈座

華麗島の版画の中では、燈座に使はれるものが最も美しい。

燈座は一月九日の玉皇上帝誕生祭、一月十五日の天官大帝誕生祭、十月十五日の水官大帝誕生祭の折、神に感謝の意を表すために作つて焼くもので、簡紙用ひて圓筒を作り、中に數々の金紙・紙錢の類を收め、筒の表面には一定の形式をもつた種々の版画を貼りつけである。



—(88)—

この版画は、木版、合羽、石版、手描とさまざまな手法が用ひられてゐるが、やはり木版數度刷のものがよい。勿論昔のものほどよく、從つて臺南でつくられるものが一番すぐれてゐる。

近來はかうした風習がすたれて來たから、

巷上を歩いても、なかなか見かけないやうになつた。

ここにかけた二つの版画は、立石鐵臣、宮田彌太郎の兩氏につづつ撰刻して賣つたもので、燈座の版画の中でもきはめて小さいものに屬する。赤・黄・綠・黒の色彩をもつたこの版画は、ちやうどトランプの繪のやうに、同じものが二つづきに掲られてあつて、頭部から二つに折り線香に貼りつけて、圓筒の中の金紙に、さすやうにつくられてある。

燈座の版画は、この島の名もなき工人たちによつて描かれ、彫られ、掲られて、無難作に金銀紙問屋に運ばれたもの、それだけに容易に置似の出来ない稚拙味、濃厚な鄉土色がだよつてゐる。



—(89)—

あやつり人形

臺灣の人形芝居は三種類あつて、それぞれ布袋戲、皮猴戲、傀儡戲と稱してゐる。

布袋戲は片手を胸につつこんで使ふもの、皮猴戲は影繪芝居であり、傀儡戲は絵であやつる人形芝居である。これらは多くの班がそれぞれ巡業的に廻り或は個人や祠廟の祝祭に呼ばれて興行した。

この版画は傀儡戲の人形である。身長は二尺位もある大きな人形である。臺南で傀儡戲を行つた班には、「小飛虎」

其他がある。

傀儡戲を行ふのは大體次のやうな場合である。

(一) 「酬神」と稱し玉皇上帝に奉納する場合

(二) 成年式

(三) 成婚

(四) 大病治癒の祝

さうしてこの人形を使ふのは一人、樂師は三人で、樂は南官系統に屬すと稱してゐる。變つてゐるのは開演の時刻で、たいてい夜の十二時過ぎに行はれる。姪婦はこの芝居を見ることを禁ぜられてゐるが、それはこの人形が骨なしのぐにやぐにやした軟體なので、これを見ると胎兒に悪い影響があると云ふところから來てゐる。このことは皮猴戲が、いつもプロフィルしか見せないので、眼が一つしか見えず、それを忌み嫌つて、神の祭には興行しても、人事の祝事には興行しないと云ふ俗信と比べて考へると面白い。

これらのあやつり人形芝居は以前、廟の庭や人家の前庭などで、簡単な設備をして演ぜられてゐたが、現在は亡びてしまつて、なかなか見ることが出来なくなつた。



木瓜と榕樹

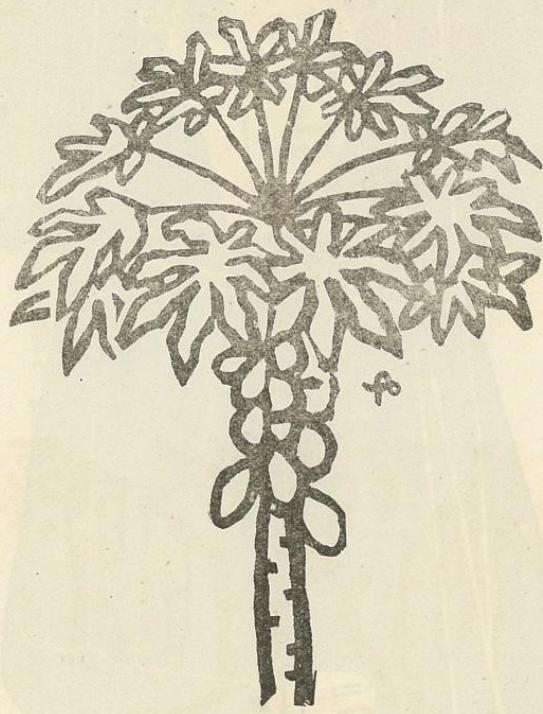
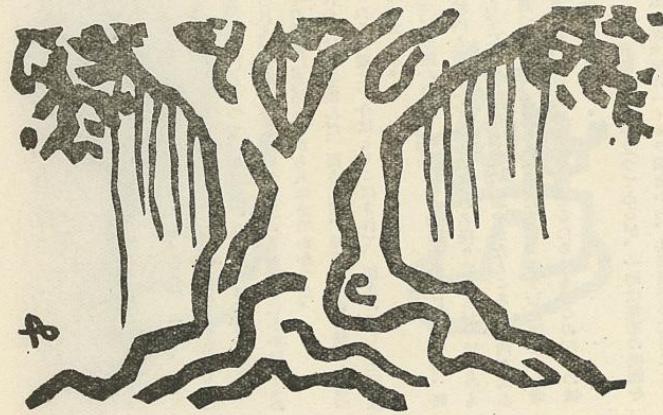
木瓜の樹は中々いいものである。

亭々として直立した樹幹。掌形の幅の廣い葉、どんな暑い日でもその葉の間から、さわさわと涼しい風が起りさうである。

内地から來た友人に、この樹に木瓜が生るのだと聞かしたら、へえ、俺は蔓に生るものだとばかり思つてゐたが、瓜の蔓には木瓜はないのだねと、感心して見上げてゐた。多分その果實の味と形とから來た想像であるらしい。さう言ふ僕も木瓜の樹には雌雄の別があつて、實が生るのは雌木だといふことを、つひ最近まで知らなかつた。

榕樹は過しい。

幹も根も思ふがままに屈曲して、ふんぞり返つてゐる。幹枝から垂れ下つた根は地上に着くと幹となつて成長する。旺盛な生活力を思はせる南方にふさはしい樹である。



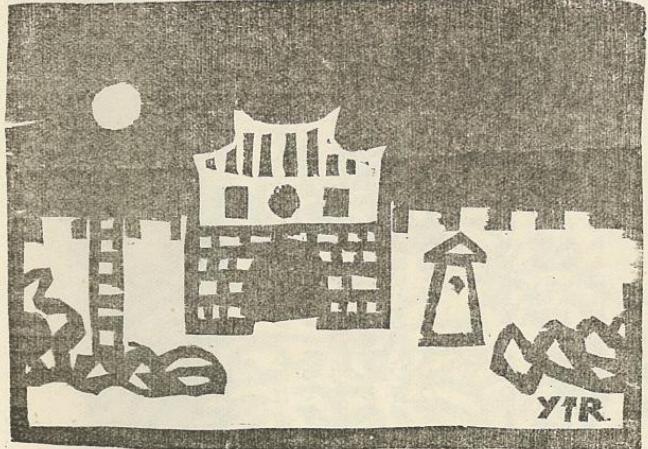
城 門

臺北には現在、四つの城門がある。景福門（東門）、靈正門

（南門）、重慶門（小南門）、承恩門（北門）がそれである。もう一つ寶成門（西門）があつて、臺北城の五樓門と呼ばれてゐた。

いづれも、當時の臺北知府陳星聚の苦心經營にかかるもので、その建築は光緒五年から八年までかかつた。

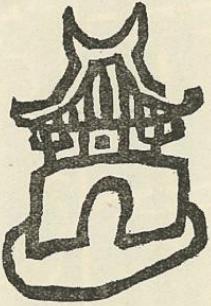
これらの城門を結んだ、高さ三間、幅三間半の、銳眼を持つた堂々たる城壁は、今はとりこはされて、樹木の美しい三線道路になつてゐる。



—(94)—

この三線道路の内側、つまり臺北市の中央部にある官衙、商店街を城内と呼んでゐるのは、昔の名残りであるが、城そのものを知らずに育つた子供たちは、暇やかなところを城内と云ふのだと思つてゐる。これらの子供たちに、さうした誤まつた考へ方を直させ、歴史に興味を持たせるためにも、この四つの城門の存在はありがたい。

今でこそ、史蹟の標柱が立つてゐるが、一時は都市の美觀をそぐと云ふ歐米流のハイカラ論者から、共同便所の代用になり



—(95)—

がちであると云ふ鼻もちならぬ愚論を吐く連中まであつて、明治三十二年こはした西門同様、取りこはし説が横行したものである。

なほ昔は、城壁の外側に濠があつた。これは外敵を防ぐ役目以外に、實は建築當時、石材運搬の便宜のために、掘つたもので、各城門の外側の濠などそれぞれ風情があつたが、今は全く濠の形跡はない。いつそ現在の三線道路の中央を掘割にして、兩側に柳を植ゑたら、どんなに、臺北は涼味を増すことであらう。観光の上ばかりでなく、都市そのものの機能の上にも、たいへんな良い影響を與へると信する。

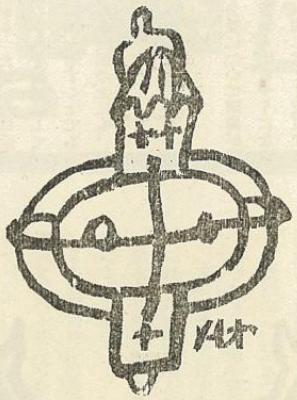
私はさう思つて向けるやうなアスファルトの上をいつもとぼとぼと歩いてゐる。

さて、取りこはされた西門の跡は、小公園になつて銅像が建つてゐる。この銅像の下の噴水は水牛の首から出るやうになつてゐるので、手さぐりを楽しむ盲人が、以前にはよく夜更けこそりとここに集まつたものである。

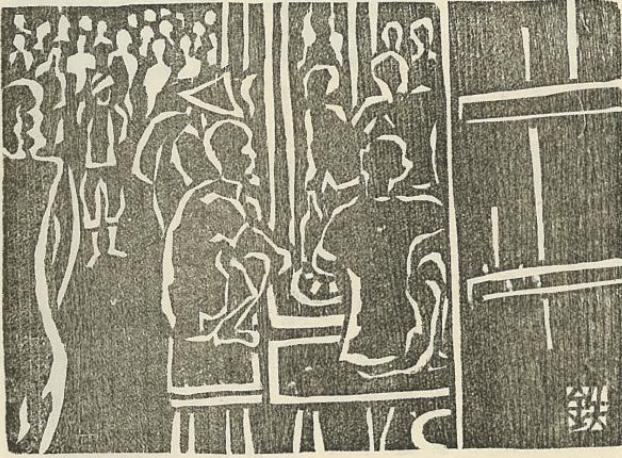
盛り場

臺北の盛り場は四角になつて「圓公園」と稱せられる位、すでに有名であるが、これは臺南だけの景色ではない。臺南にも高雄にも大きな盛り場がある、名の通りの大衆簡易食堂の役目を果してゐる。値段が格安で腹いっぱい食べられるこの料理店はもう大衆には必要缺くべからざるものである。

料理の風味も同じ島内ではありながら北部と南部とは違つてゐる。南部の方がこつてりと美味であるといふのが定説になつてゐる。臺南での名物料理は何と言つてもターミーであらう。これは「擔麵」と書いて、その字義の通りはじめはかつぎ荷で商賣をしてゐた臺灣そば屋である。今では臺南の町に、このターミー屋が十軒ばかりあ



る。先づ店構に特徴があつて、營業は必ず夜であるがその店はひざを入れるに足りない位に小さい上に、かかる燈影で客も主人も向ひ合つて坐り込んでゐる情景は一風變つたものである。これは一つかみの臺灣そばに煮出し汁をかけて、豚肉と蝦肉をコマ切にして辛く煮つめて、多いレコードでは二十杯以上食べるものがあると聞いた。この傳統的なターミーも盛り場の中にも進出してゐる。他の臺灣料理の種類は北部とあまり變らないが、米粉にしてもイーミンにしても主に麵類は南部の方がうまい。それに加へて、南部の果物は豊富である。夏のマンゴーに龍眼、蓮霧、冬の西瓜は壯觀である。夏の夜の盛り場には臺灣料理の香と共にこれらの南國の果物の香が高く匂つてさはやかである。今では臺南の町に、このターミー屋が十軒ばかりあ



墳墓と迷信

ふうする——「陰陽家にて墳墓の地の善惡を相する術。風水」

宜しきを得れば自己及び子孫繁昌すと云ふ(大言海)

風水——「陰陽家の説で支那民族特有の迷信思想。即ち天地の二氣が完全に相調和する地域を擇んで都城を建て住宅を營み、墳墓を造ることを本義としてゐるもの」(新撰漢和辭典)

宇野哲人、長澤規矩也編)

風水——「風水とは蹄鐵形の墓を云ふ其名地水火風即陰陽五行説より出でしと稱す。風水を築く所に適否ありて若し不良なる地に風水を築くときは子孫に祟りありと云ひ地理師一名風水先生に相せしめ然る後風水を築く」(臺灣風俗誌、片岡巖著)

風水(墳墓)の地位の吉凶を定める標準となるものは龍脈である。

伊能嘉矩氏の『臺灣文化志』に「龍脈の説は區々傳ふる所」ならず。其臺民に唱へらる所に就きて言へば、凡そ地背の速り

たる一條の勢をいひ、廣く一地域に亘りて存在するのみならず、一邱一

堵の間にも存在するものとせられ、

其龍脈の通する所を吉地とし就中分

脈即ち支脈を分出せんとする箇所を

最吉となし、注脈即ち龍脈の末端及

び龍脈に非ざる箇所を凶となす。如斯の信念よりすべて墓地は

龍脈の上に營み、高を後にし低を前にするは漢民に通有する慣

行にして、若し土石の掘採により龍脈の形勢を破壊するときは、吉地變じて凶地と爲るといふ在り云々」

「臺灣に於て普通風水と云ふ時は主に墳墓を指す、殊に多く山地の墳墓を指す。……風水は山地に獨立した廣き地所に造られたる墳墓を意味し、共同墓地に在る一々の墓は風水とは謂はれないものである。(『臺灣宗教と迷信陋習會景來著)

一個人の墓を作るために迷信に支配され、廣い土地を占有し莫大な金をかけ、地理師に馬鹿げた金を拂ひ、墳墓を自己の利益のために利用することは本末顛倒である。

「文藝臺灣」昭和十六年十月號に、島田謙二氏が紹介された



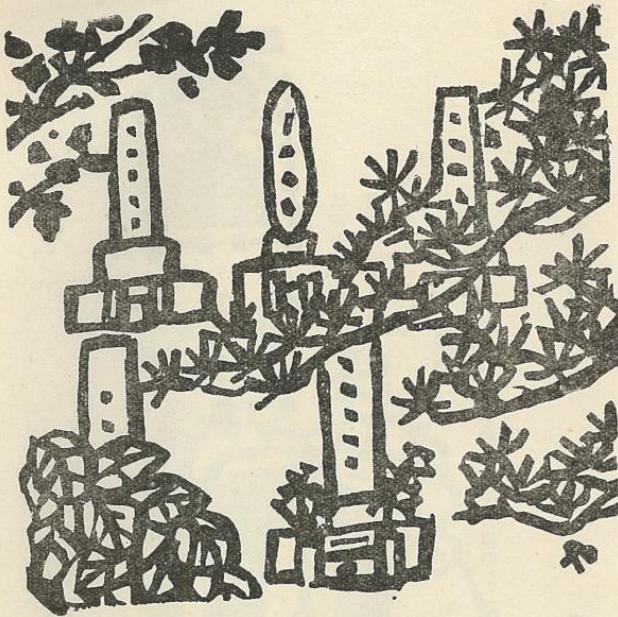
—(98)—

ジャン・マルケの佛印小説「田から山へ」が近頃土屋宗太郎といふ人の譯で「安南の一族」として出版されたが、その中に占師が神聖な計儀を持つて主人公ダノの墓地を選定する場面が面白く書かれてゐる。

これは餘談である。

漱石の「こころ」にこんな一節がある。——先生は是等の墓標が現はす人種々の様式に對して、私程に滑稽もアイロニーも認めてないらしかつた。私が丸い墓石だの細長い御影の碑だのを指して、しきりに彼は云ひたがるのを、始めのうちは黙つて聞いてゐたが、仕舞には「貴方は死といふ事實をまだ眞面目に考へた事があれませんわ」と云つた。

これも餘談である。





連
杯

信仰あつく 愛情ふかく。
誓ひには血を盛り、歡喜には粟酒を盛る、この素朴さに、わたしは拍手を
送らう。

文様に彫りつけられた「百歩蛇」。古代の神のこころが、まだ生きてゐる。

濱田集雄



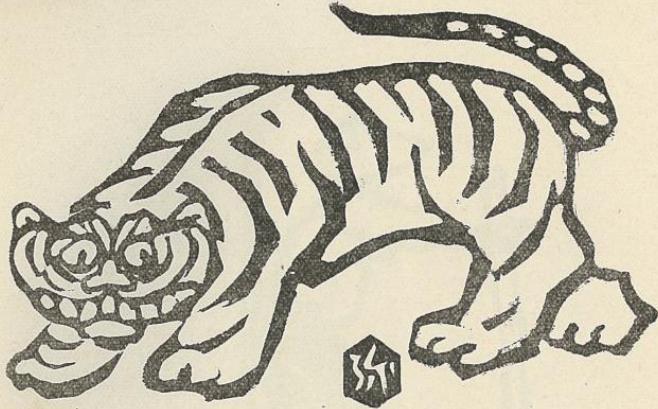
福虎

山

の麓に村があつた。村には小さな廟があつた。僧は毎日食料に不自由してゐた。その廟の床下に福と呼ばれる老鰐が寝泊まりしてゐた。ある日、福は人にいやがられる老鰐渡世をやめて、僧の弟子にならうと發心した。僧に話すと、よからう、それでは先づ七日七夜、飯を食はずに修行せよ、と云つた。福はうなづいて、暗い部屋にとちこもつた。八日目の朝、僧は福を呼び出して、この村には火がないから、お前はあの山の頂へ行つて、飯を炊く火を取つて來てくれ、と云ひつけた。福にはもはやそんな氣力はなかつたけれど、これも眞人間になる修行とあきらめて、素直に出かけて行つた。途中で大きな虎に出逢つた、福は、虎よ、お前は私を食べるつもりか、と尋ねた。虎は三度うなづいた。福は仕方なく、それでは山の頂で火を取つて廟に納めるまで待つておくれ、と頼んだ。大虎はまた三度うなづいた。そこで福は、大急ぎで火を廟へ持ち歸り、再び引き返して、虎の餌食にならうとした。すると大虎は福を脊に乗せて昇天した。

* 老鰐 無賴漢

西川満敏



龍骨車

龍骨車。低い土地から上の田に水を押し上げる水車である。すべて木で出来てゐるし、簡単に組立てが出来る。踏むのは一人のもあれば、二人のもある。もつと大仕掛けになると、齒車をつけて牛に牽かせてゐるものもある。夏の日でりに踏む龍骨車。それは特異な臺灣の風景の一つである。



船

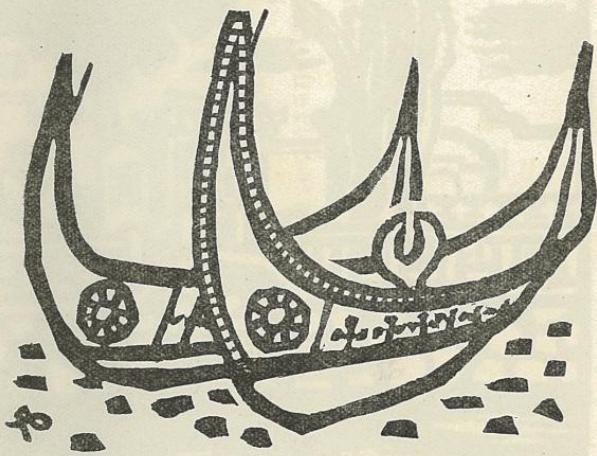
傳へには云ふ。

彼らは丸木舟に乗つて南から海を越えてきた、と。

丸木が、純朴な曲線と稚い文様とで波を切るやうになつたのは、いつからか。それは知らない。

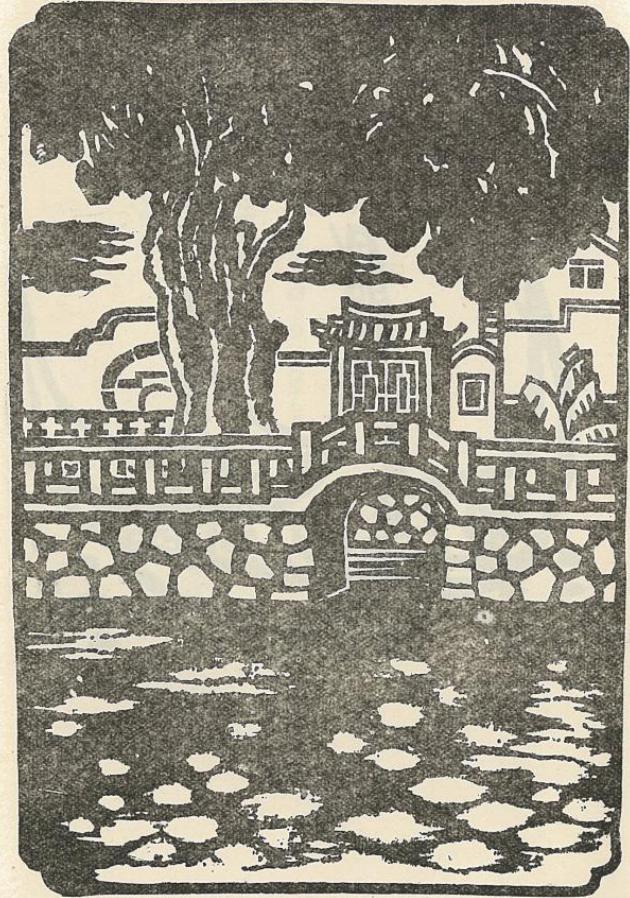
ただこの島 紅頭嶼は、今尙原始共同體を残し、彼らは子供のやうに汚れない土偶を作る。

濱田 隼雄



林本源庭園

もはや門のしまつた廣い庭園の中には誰もゐない。西空の最後のいろどりを泛かべて、池面はかすかにゆれてゐる。龍の吐く、いさかの水の波紋が、かぐろい巖を積み重ねた釣魚磯まで擴がつてゆくのだ。かくていくそ度、巨大きな池は死のやうに美しい夕映を寫し出したことだらう。幾百年を経た鬱蒼たる樹木、空高く嵯峨として聳える層巒奇峰、さてはその間を縫ふうねうねとした石運や、曲折した階梯、隧道にとりかこまれた寂寥たる池面の、その一瞬の哀しさは、また何に例へたらよからう。池畔に建てられた亭の、反りかへつた屋根の碧青、太い圓柱の丹朱、悒鬱な黄昏の空の七いろ。水はこの



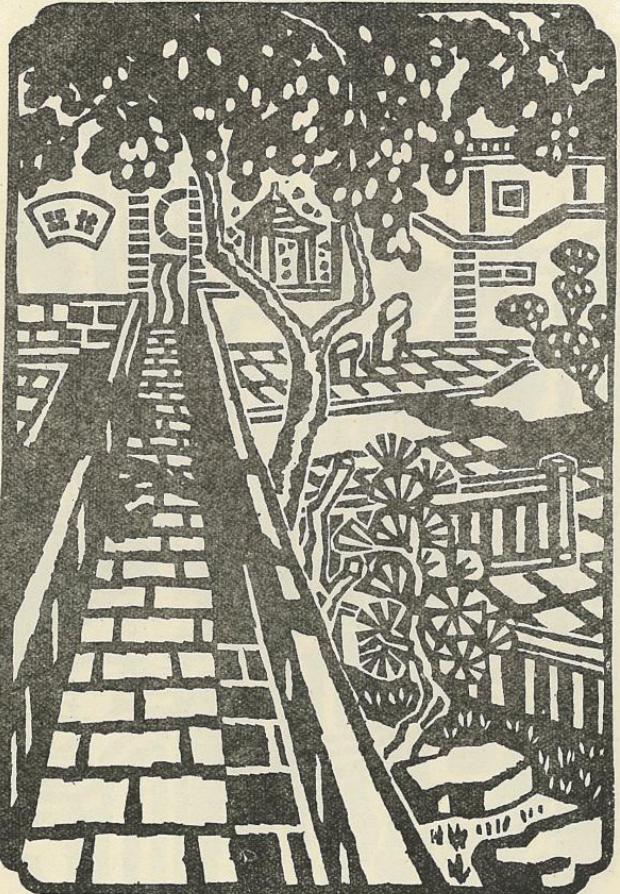


—(110)—

—(111)—

美しさに身を委ねて、なやましく息つき、悶えてるるので。この中にあつては、報春鳥(ほうしんとう)でさへも可憐な生を永遠に絶ちたくなるであらう。かへらぬ人を怨じつて凄艶の美女がもの思ひにふけつたと云ふ石橋の上、一道の妖氣がたちこめたかと見れば、屏牆をくりぬいた圓門から、黃色の長衫をまとつた瘦身の公子が現はれてくる。七寶をちりばめた大刀(おほのこ)を身にはき、白衣の供者を連れた、將軍に護られて——。凱旋の樂がひびき、毛竇の見事な桃花馬(かじゅわま)がいなく……。だが、それはこの庭にねむる精靈たちのまほろしだ。聞こえてくるのは、ほの暗い梢をわたる軟風(なんかぜ)の歌ばかりである。

石の洞窟の中では、小さな蟲が鳴き出した。定靜堂の白壁に僅か残つた鈍色の明かるさも、今は消え失せて、身にしみる夜の沈黙(しじま)のあやしさ、つめたさ。かくてこそ語らざる石に祕められた哀戀の情史も、このまま冷えゆくのであらう。



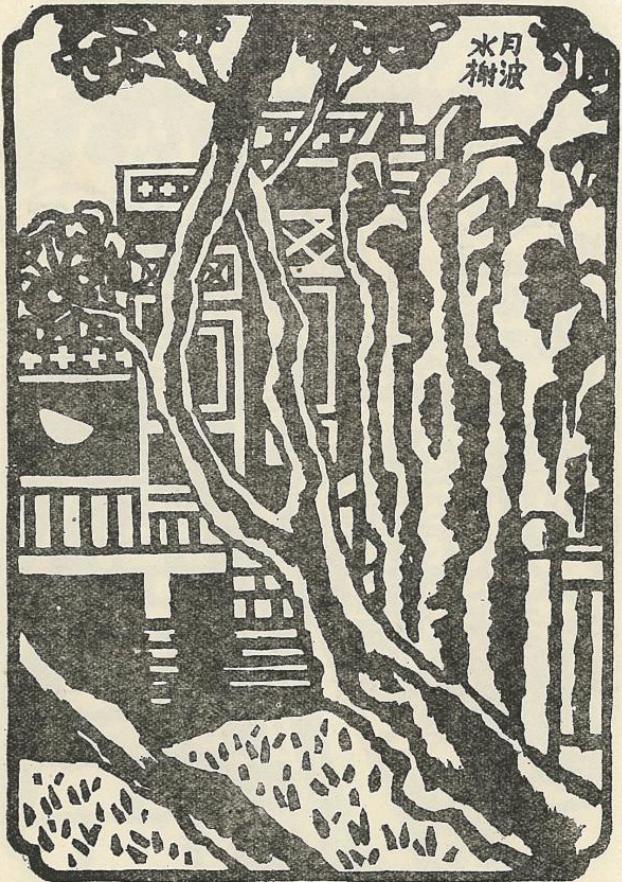
—(112)—

—(113)—

百花姫を爭ふ廣々とした後庭には、五歩に一樓、十歩に一閣、芳麗な幾多の建物がある。屋上が甃石の通路になり、廻廊がきはまつて小房になる、その立妙な支那建築の絢爛さ。そのかみ百千の文人墨客が、或はこれらの曲房亭榭にあつて、萬巻の書を繙き、或は芬々たる花間を逍遙して、思ひを詩に託し、如何ばかりその詩情を慰めたことであらう。方鑑齋の上に月が昇つた。乳色にけむるおほろ月だ。様の間を洩れてくるありなしの光をたよりに、人知れず作られた螺旋の階段を登りつめ、玲瓏たる來青閣の上廊に着めば、歪み、反り、波うつて連る民家の甍が、ほうつと泛かびあがつてくる。

この眺め、この感傷、これこそ千年の歎にも比すべき、覇者の持つ唯一の愉悦ではなからうか。そしてかかる夜は、見渡す限りの甍の一つ一つから、その家を守る祖先の靈が平安を奉告するため昇天してゆくに違ひないので。すでに紅梅の香漂ふ林家の大庭にも、歴代故人の魂魄が彼方此方うれしけに遊

水月
樹波

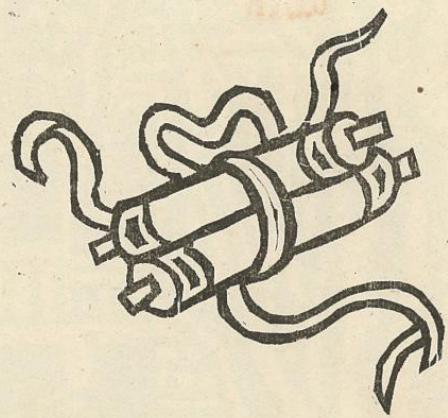


—(114)—

飛しはじめたではないか。玻璃燈の下、薔薇架を見下して、わたしは激しい
眩暈に息絶えるのを覺えた。

西川 満

—(115)—



—(116)—

臺灣繪本

(奥附)

定價並裝 貳 圓

編者 西川 满

發行人

臺北市大正町二丁目三十七番地ノ二

發行人

上田八郎

印刷人

西川 頴

印刷所

臺北市新店街四丁目三十二番地

昭和十八年一月二十三日印刷
昭和十八年一月二十八日發行



發行所

臺北市泉町二丁目一番地
交通局鐵道部內

財團法人

東亞旅行社臺北支社

